反響ー甘み

u_

反響

　昼間、草木を根刮ぎ焼き尽くすような日差しが照り付けた夏の日も、朝から雪混じりの風がびゅんびゅん唸る、凍て付く冬の日も、夜が更けてさえしまえば、間違いなく全てが落ち着いて、暑くも寒くもなくなると、感じられてしまう日がある。そんな日は必ず、彼は日の暮れ掛かる頃から、独り部屋で横になって真夜中を待つ。眠らずにずっと耳を澄ましていると、狙い澄ましたように、起き上がるべき時間が、自然に彼に知れるのだった。そうして、小さな丸テーブルと折り畳み椅子を抱え、静かに収まり返った夜空の下を、円やかな澄んだ空気を全身に染み入らせるように、ゆっくりと進む。巨大な倉庫の前の、そこだけ青い灯りに明るく照らされた所が、そんな夜の彼の決まった居場所だった。

　テーブルを据え、椅子に掛け、倉庫の向こうの港町の中の何処かから、一直線に彼の胸の奥に突き刺さってくる、針の先のような痛みを、先ずは受け入れなければならない。するとテーブルの上には、彼が望みさえすれば、何でも現われるのだった。彼は好きなだけ薬を飲みたくなった。それも一粒一粒みんな

違う、見た事もないような変わった色や形をした錠剤を、水なしで次々に飲み続けたかった。

色形だけでなく、作用も全て違うので、その薬の数だけの心身の変化を、同時に感じられたらと思うのだった。そうして、その薬の数だけの様々な自分が、その数だけの全く違った世界を見て取って、それらの景色を同時に味わえれば、どんなにか楽しいだろう。

すると、テーブルの上に、小さな透明なガラスの瓶があった。中に色とりどりの錠剤が見て取れる。しかしどれも少し小さいのが、彼には何となく不満だ。右手を伸ばして、それを取ろうとする。しかし、薬瓶がテーブルの上に出て来るまでの間、肘掛けに右腕を折って乗せ、そこにずっと上体を押し被せていたので、右腕はすっかり感覚がない。何かを強く望むには、何時も偏った姿勢が必要なのだった。折り畳み式の肘掛けはひん曲がって、実際もう何本か折っている。肩を捻って、やっとの事で右腕を持ち上げたが、それはテーブルの上にボトリと落ちたまま、もう動かしようがなかった。腕の外に絞り出されて、宙に浮いた棒のように感じられる痺れが、恐ろしく緩やかな大波となって、肉を抉り出すように差し込んでくる。暫くしてそれは、腕を擦り潰すような重い痛みとなって、腕の骨の中から徐々に甦ってくる。

仕方なく、左腕を伸ばして瓶を取ろうとする。瓶は、左手の強ばった指の間

を滑って、テーブルの脇に落ちた。そこはコンクリートだが、何か強力な薬品がその上を何度も流されたに違いない。表面はすっかりぼろぼろで、絨毯のように柔らかい。薬瓶は音もなく落ち、そうするのが役目のように、跳ねるように転がっていって、独楽のように回りながら止まった。

　その直ぐ先に、彼女が居た。紺のカーディガンを纏っていたが、腕を前に組んで、少しだけ寒そうだった。薬瓶に向かって、少しだけ微笑んだ。その薄い色のやや幅の広い平板な唇を閉じたまま、そっと腕をほどいて、右腕だけ前に垂らし、ゆるゆると腰を折っていった。膝と膝をぴったり合わせた細い脚を、ほんの少しだけくの字にして、殆ど腰の高さを落とさずに、腰を深く折って、薬瓶を少し湿った右手の指に引っ掛けた。

　自分の左手を見ると、どのようにか彼はもう、その瓶を彼女から受け取っていた。彼は暫くそれを眺め、思い出したように、ガラス瓶の表面に付いた彼女の指の湿り気を、自分の人差し指の先でなぞるようにした。それから、人差し指を真ん中にした左手の三本の指だけで、瓶の蓋をのろのろと回して外し、瓶を口に持っていった。仰け反って口を大きく開け、その上に瓶を逆さに翳したのに、錠剤は一粒も出て来ない。余りにどれも変な形をしているので、互いに引っ掛かって、中で詰まってしまうようだった。彼は、瓶を持ったままの手をテーブルの上に置いて、瓶でテーブルをコツコツと叩いた。

彼はその音に目が眩んだ。体が揺れた。慌てて前を見据えるようにすると、そこに彼女の姿がなかった。しかし直ぐに、その少し先に彼女の姿は見付かった。するとコツコツいっていたのは、彼女の靴音だったろうか。そこで彼女は、背丈の何倍もある、大きな倉庫の扉を開けようとしていた。彼は、蓋を外したままの薬瓶をポケットに入れて立ち上がり、何とか独りで扉を開けようと色々に姿勢を変える、彼女のしなやかな動きを目で楽しみながら、ゆっくりとそちらに近付いていった。

彼は先ず「どうしたの」と彼女に声を掛けた。彼女は、ほんの微かにだけ悪戯っぽい目をちらりと彼に向け、また直ぐに目を逸らして、何か言った。力を入れしなにモノを言おうとして、巧く舌が回らなかったようだ。言い直そうか、一瞬迷っているようだった。彼はその隙を逃さず、触れるか触れないかのぎりぎりの所まで、素早く彼女に体を寄せ、二人で扉を開けようとする恰好を作った。

すると扉ではなく、倉庫全体が、物凄い力で回り出すようだった。先ず彼が、足元が怪しくなって、彼女にしがみついた。彼女も彼にしがみついた。それで誰が二人を支えるのか。彼は、軽い目眩に襲われたような気さえした。二人はしがみつき合ったままで、何処かへ投げ出された。

地面に転がったのは彼女だけだった。彼は立ち尽くしていた。なぜなら、彼

だけが目眩を覚え、彼女は少しも目眩を覚えずに、冷静に自らの動きを見て取っていたからだ。そう、彼には思えてしまうのだった。彼は、転がってゆく彼女の、ほっそりした剥き出しの両脚を眺めていた。彼女は何回転かして脚を跳ね上げ、そこからまた何か聞き取れない事を口にしながら二回転くらい戻って、自然に大の字になって、けたたましい笑い声を上げた。

まさかその声のせいではないだろうが、彼女の開いた脚の直ぐ前で、倉庫の扉も少し開いていて、女の笑い声は、倉庫の暗い闇に切り込んで、ぐんぐん中へ突き刺さってゆくようだった。その恐ろしく奥深い、奥深すぎて却って虚ろな反響が、彼の耳に届いた。

彼は、一向に起き上がる気配を見せない彼女に歩み寄り、まだ痺れたままの右腕を、太いロープを投げるようにして差し出した。彼女は笑うのをやめ、しばらくそれをぽかんと見ていたが、両手で素早くそれを掴み取って、棒のように真っ直ぐに立ち上がった。彼は、右腕がもげるようなひどい痛みを感じた。呻き声すら出せない程だった。しかしそれで右腕の痺れは退いていった。

彼女はそのままの勢いで、棒がバネを仕込んで跳ねるように、扉の開いた隙間を擦り抜けて、倉庫の闇に姿を眩ました。そう長くも短くもない後ろ髪から紺のカーディガンの背中まで、コンクリートの粉で真っ白だった。

彼は躊躇った。それでも一歩だけ踏み入って、上体を捻り、扉の直ぐ脇の壁

を左手でまさぐり、灯りのスイッチがないか探した。倉庫の中は全くの闇で、どのようにか彼女は、足音すら立てないのだ。幾ら手探りしても、彼はざらざらの壁を撫でるだけだった。それで指先を擦り剥いたが、焦る気持ちで、わざとその指先を、また壁に擦り付けたりした。

　倉庫の中に、真っ赤な灯りが一つポツンと点った。一瞬、彼女の、肩幅の狭い小さな背中が浮かんで消えた。それは離れ小島のように、ほんの限られた所だけを照らして、とてもその周りにまで遠近感を齎してはくれなかった。彼は取り憑かれたように、そこ目掛けて真っ直ぐに進んだ。力の限り地面を蹴った。足元はふわふわしていた。足音がしない訳だ。

　彼は、自分が歩いているのか、走っているのか、まるで分からなかった。ただ、少しでも速く、前に進もうとだけしていた。そして、次第に近付いてくる、その真っ赤に照らされた中に、何も形らしきものを見て取れなかった。そこは、

　その赤みに、一つに溶けているだけだった。
まだ何も始まっていなかった。（二〇〇一年二月二十一日）

熟達

つんのめるようなまま、上体が左右に振れて揺れているだけで、少しも進んでいなかった。赤いぼんやりしたものが、前にただ浮かんで見えているばかりだった。立っているのかも分からない。横になっているかも知れない。

　彼はそう感じさせられるだけで、視点を定めて、自らを見直す事も出来なかった。ただ与えられていて、そこには形らしきものがなかった。しかしそれで、何もせずに済むのではない。それらを受け入れられるよう、進んでそう自らを仕向けていなければならないようだった。そうしていなければ、足首を後ろから掴まれて、ずるずると何処かに引きずり込まれ、自分でも分からない内に、溶けて消えてしまいそうだった。

　その赤いものに、届きそうにも、まして触れられそうにもないなら、せめて自らの体に触れてみるべきだ。その触れられた体の感触から、自らの有りようを見直せるのではないか。その感触を繋ぎ合わせて、人の体の形を掴み出して据えられたなら、色々とまた違ってくる筈だ。

　そうしようとして、その通り触れられたのだろうか。確かに一つ、何か形は現われた。しかしそれは、彼と赤いぼんやりしたものの間に浮き上がったきり、もうまるで触れられそうになかった。それが彼の体なら、なぜもっとこちらに寄り添って来て、彼と重ならないのか。それは全く透き通っていて、その向こうの赤みに、隅から隅まで染まっていた。

それが自分の体なんだ、きっと何かのからくりが、それを自分の体でないように見せているだけだ。そのような何か少しでも筋の通った事を考えようとするのだが、その自分の体でなければならない当の姿が、考える邪魔になる。彼は、何一つ手掛かりを掴めない中に投げ込まれて混乱し、自らの体が、こんな風にしか現われて来ないのを、情けなく、やり切れなく思うのだった。幽霊が自分の姿を鏡で見て、ふと我に返ってしまったら、多分同じような気分になるのではないか。

人の形を据えられるなんて、全く見当違いなのだ。その赤く透明なものは、少しも人の形などしていない。その奥の赤いものと同じで、ただぼんやりしている。隅々まで赤く染まっているにしても、一体どの辺りが隅なのやら、見れば見る程分からない。しかも全く透き通っているのだ。いや、そう考えると、もうそれは見失われていないだろうか。間違いない。すっかり見失われている。そこには何もない。そこから何かを見て取ろうとする、まさぐるような彼の視線がさまよっているだけだ。それで彼は、慌ててまたそれを、そこに立ち上げるしかないのだった。それすら見失われたら、彼自身もその場で溶けて消えるしかないのだ。

しかしそうして、再び見出されたその姿は、それがそこにありそうだと言う、彼の思い込みに支えられてだけあるようだった。少しも血が通っていない。い

やそれなら、見失われる前は血が通っていたのか。どうやらそうだったようだ。そう感じられていて、それは彼の体だったのだ。しかしもうそれは、そこに他のものがある筈がないので、ただ彼の体であるしかないだけだった。

　なぜ他のものである筈がないのか。彼が自分の体に触れようとして、それはそこに現われ、その彼だけに、それは見えているからだ。そうであるなら、何かの弾みでそれが見失われたところで、それはずとそこにあって、びくともしないのではないか。そう思うと、大変な発見でもしたような喜びが込み上げて来て、ただそれに触れようとさえすれば、触れられそうにも思えて来るのだった。

　見えない腕が前に伸びた。その見えない指先に、早速何かが当たった。まさぐると、それは硬く平板で垂直だった。微かな引っ掛かりがある。指先をこじ入れて引っ張る。重いが、ガタッと一つ動いた。指先は奮い立ち、もがくように進む。そこに一枚、或いは二、三枚かも知れないが、そこにある限りの、片手で掴める紙切れを、掴み取った。何が書かれてあるか、読まなくても分かる。触れられたものの身分を明かす紙だった。もちろんそれは、寸分違わず彼の身分であるしかない。腕がそろそろと引っ込んで、引き出しを閉めるようにした。

　それは、全く引き出しの形だった。その引き出しが彼の体だった。中から取り出した紙にそう書いてあるのだから確かだ。とすれば、もうそれより先には

何もない。自分の体がそんな引き出しの形とは、がっかりだ。触れられないままの方が、良かっただろうか。

それで彼は、少しばかりそれを、ぞんざいに扱い過ぎた。最後は押し退けるように、それをピシッと閉めた。それですっかり、それを敵に回した。

実は、引き出しはただ引き出しで、それと別に彼の体は、引き出しの後ろに守られるようにして、畳まれてあったのだ。そこから引っ張り出される、人の形をしたその姿が、これ見よがしに晒された。しかし直ぐにそれは、どんどん分かり難くなって、引き出しの裏側に吸い取られるように、すっかり消えてなくなった。ただ紙だけが残った。姿が消えて、そんなものだけでどうなる。却って邪魔だ。その文面に囚われて、動きが取れない。彼にまだ何か力が残っているとしたら、ただ奪われるためでしかなさそうだった。

せめてゆったりと構えるしかない。弱みを見せるべきではない。引き出しもまたゆったりと構えた。恐らく彼の何十倍も。引き出しは、透明でその隅々まで赤い姿をすっかり現した。今度こそそれは、彼の体そのもので、嘲笑うかのように、彼の直ぐ鼻先で、自らをゆらゆらと揺らすのだった。

女の声がした。彼女だ。咄嗟に彼は、「どっからだ？」と、何処へともなく、問い掛けたに違いない。その彼女自らの声で、

「後ろからだよ。」

と返ってこなかったろうか。それを継いで、何かしらの言葉が順々に続いて、彼女の声は已まなかった。明らかに、彼に呼び掛けていた。それは「ねえ、何してるの」と言っている筈だった。

ただそう聞き取ろうにも、彼女が退屈しのぎに思い付いた、何か架空の動物の鳴き真似のようにしか、彼には聞こえなかった。ねぇ・なに・し・て・る・の、とそう聞き取ろうと努める程、声は、人間の言葉らしい角々しさを振り払い、動物の鳴き声そのものような滑らかさを纏っていった。

それが後ろからなら、振り返ればいいではないか。しかし何処が後ろだろう。前はある。不愉快な透明な赤い揺らめきが見えるのが、前だ。では後ろは。くるりと振り向けば、そこが後ろか。そうしてみた。

するとどうしてか、引き出しの後ろの、赤いぼんやりしたもののそのまた後ろに彼は回り込んでいないだろうか。そのぼんやり赤い何かの後ろ側が見えてしまうようなのだ。いきなりそんな所に回り込める筈がない。同じ所にいて、後ろを振り返ったかどうかも定かでない。しかしその赤いものの、前も後ろも同時に見えてしまう。

その赤い中に彼女が居るのか。それとも、彼にはそうは見えないが、実は彼がその赤い中に居て、彼女がその後ろから声を掛けるのか。

その間も、彼女の鳴き真似はしつこく続いた。しかし何処かよそよそしくな

いか。幾ら呼び掛けても、彼から返事が貰えないので、ただ独りで楽しむために、好き勝手に声を引き延ばしているようだ。

　何としても、確かな後ろを振り返りたい。彼女の方を向けてなくても、そうして何とか声を出して彼女に応えたい。ただ、このままでは、迂闊に声は出せない。目の前の引き出しは明らかに敵だ。彼の無防備な声が、その引き出しに捕らえられては、どう悪用されるか。その声を、鋭く研いで曲げて、ブーメランのように彼の喉元に突き返すだろう。

いや、それでいい。そうして喉から血が噴き出せば、それが彼女への返事だ。言葉などより余程伝わる。彼は声を上げた。聞き取れない。大声を振り絞る。虚しい努力ではないか。声など出ないのだ。声は体からしか出ない。それは引き出しの後ろに消えたか、その引き出しが彼の体であるかだ。

　彼女の声の調子が少しだけ変わった。ほんの少しだけ。変わる瞬間を聞き逃したら、分からず仕舞いだっただろう。しかしその変化を聞き取った直後から、声は耐えがたいものになる。

　彼女による動物の鳴き真似ではなかった。動物による彼女の鳴き真似だった。いや鳴き真似はおかしい。動物が人間の声色を使っているのだ。それも彼女が、ただ彼に向けてだけ考え出した架空の動物であるのは明らかだった。聞いた事のある、どんな動物の鳴き声とも違った。

彼女は彼に、彼だけのための架空の動物を差し向けたのだ。そんな事は彼女にしか考えつかない。
「どうしたら姿が見られる？」と、また何処へともなく問い掛ければ、何か答えが返ってきそうな気もする。いやダメだ、手遅れだ。正しい答えが返ってきて、その通りにしても、見た事もない、見たくもない醜い動物の姿に、打ちのめされるだけだ。
声色は次第に熟達していった。はっきりと、ねぇ・なに・し・て・る・の、と、今にもはっきり聞き取れそうだった。引き出しも紙切れも、きれいさっぱり消えていた。多分怖くなって、足を生やして逃げ出したのだ。
赤いぼんやりした何かだけがあって、ずっと変わっていないように見えた。その変わっていないのが、何か変にも思えた。
まだ何も始まっていなかった。（二〇〇一年三月二十一日）

耳

よろけたようだった。腰が捩れて、上体が大きく左に傾いていた。しかしそれで彼は、自分が立っていると分かった。そのまま倒れないように、右足を一

歩、出来るだけ斜め前に踏み出した。その右足が見えた。そこだけ白い光が当たっていて、その光に切り取られた右足が、今にも目の前に迫って来そうだった。その右足が踏み締めている床まで見えた。剥がれたり削れたりしてゴツゴツした、汚い灰色の床だった。

　そこから真っ直ぐ前に目を遣っても、赤いぼんやりしたものはそのままだった。ただそれが、彼の右足と床を照らしているのは明らかだった。ではなぜその光は白いのか。彼はもうすっかり、その赤いものが照らす中に入っていて、外から見えた赤みも、当たり前の白い光にしか見えなくなったのか。それだけ目が慣れたか。それなら、その彼を照らすものが、形も大きさも変えず、赤いまま彼の目に映るのはどうしてか。

「ねえ、なにしてるの」

と後ろから声がした。その後ろは、彼が振り返れば、必ずそこに見て取れる確かな後ろだった。そして、自分の右足を見付けてからは、彼には何も聞こえていなかったようだ。その空白のおかげで、彼は、彼の後ろと距離を取れるようになったに違いない。

　そうして愈愈、後ろを振り返ろうとすると、彼は赤いぼんやりしたものの両側に、彼女の姿を見た。左の彼女は青い顔をしていて、右の彼女の顔色は黄色っぽかった。どちらも、しゃがみ込んで、揃えた膝の上に顎を乗せて、体の前

で折ってぴったり合わせた両脚を、両腕を組んでしっかり抱え込む恰好だった。細身の彼女の体は、見事に折り畳まれていた。体は真正面に彼と向き合っていた。瞼が何となく重そうで、口を少しだけ尖らせていた。

動きと言えば、たまに、上を向けた爪先を左右交互にぴくぴくと反り返らせるのが目に付くだけだった。その動きに合わせて、体全体を微かに揺すっているようでもある。二つとも宙に浮いていて、赤いぼんやりしたものをまん丸い顔に見立ててると、それらは左右の耳だった。

その唇が微かに動いているのを見て取ると、彼は直ぐさま、それを読み取った。

「ねえ、なにしてるの」

しかし声は出ていない。そして二つの顔の目が、真っ直ぐ彼を見ているようで、彼の直ぐ後ろだけを見ているのに、彼は気付いた。すると彼は、自分で後ろを振り返ったのか、誰かに髪を引っ掴まれて無理矢理振り向かされたのかは分からないが、そこに強い力が掛かるのを感じて、彼の体は真後ろを向いた。

彼の脳裏を、それを一目見ただけで生きる望みを根刮ぎにされるような、架空の動物の醜い姿が掠めた。やむを得ない事だ。ただ、その姿を確かに垣間見て、恐ろしさに一瞬身を凍らせなければならなかったが、それは直ぐその場に倒れ、黒く焼けただれたようになって、形をなくした。

目の前に、彼の背丈ほどもある、縦長の窪みが一つ宙に浮いていた。真っ赤で、テカテカと輝いていた。中は捩れて皺皺で、中心ほど深く窪んでいて、臍にそっくりだった。その周りは、何処まで行っても何もない、つるりとした透明な闇が取り囲んでいるようで、その闇の全重量に支えられて、その巨大な臍はそこに浮いていられるようだった。そしてそれは、上から下まで真っ赤なペンキをぶっ掛けられたばかりのように、赤いどろりとした雫が、全体から忙しく垂れるままになっていた。

窪みの中の皺皺の一部が、延びたり縮んだりを繰り返し、その度にそこから声が出ていた。そっくりあの架空の動物の声色に聞こえたのと同じ声音だった。

彼は直ぐに分かった。これは声の鏡なのだ。恐らくはただ彼女の声だけを映し、彼の耳だけにそれを伝える鏡だ。彼女は何処からか彼に声を掛けているが、それは彼の耳には届かない。その換わり、その声を映す鏡の中の声は、彼に届くのだ。試みに目を閉じると、瞼の裏に全く同じものが浮かんだ。彼はそれを耳で見ている。

再び目を開けると、それはなくなっていた。彼はまた向き直って、赤いぼんやりしたものと面と向かっていた。彼女の姿の二つの唇は、もう少しも動いていなかった。唇だけでなく、彼女の体は死んだように止まっていた。わざとそのような様子を、彼の目に晒そうとしているようだった。声も已んでいた。彼

が答える番に違いない。
「お前を探してるんだよ」
お前を…で、もう声は、バラバラに崩れていた。…探してるんだよ、は、その崩れたものに行く手を阻まれ、窮屈そうにくぐもって、彼でさえ終わりまで聞き取れなかった。
「お前を探してるんだよ」と彼は繰り返した。声は初めから崩れて、直ぐに向きを変え、カラカラに乾いて粉々になって、彼の喉の中に纏めて吹き込まれるようだった。一瞬、その粉の塊がピンク色に見えて、背筋に寒いものが走った。迂闊に声など出せない。その粉は猛毒を含むに違いない。
それで彼は、咄嗟に、青い方の彼女の顔を見て、「お前を探してるんだよ」と唇だけ動かした。その彼女の目は、相変わらず彼の後ろを見ていたようだが、彼が唇で言い終わると、はっきり彼の顔を見て、一つ瞬きをして、その目を少しだけ余計に見開いた。彼が何を言ったかは聞き取れなくても、何かを言ったとだけは、分かったのだ。
もう一度唇を動かした。その途中、彼の目は、左の黄色い彼女の顔に向けられた。顔も体も真っ直ぐ彼と向き合っていたが、その目だけは彼でも彼の後ろでもない、何処か余所に向いていた。慌てて彼は、青い顔に視線を戻した。しかし、目を離した隙に、その彼女の目はすっかり虚ろで、開いてはいても、暫

くは何も見ようとしないようだった。

自分でも少し意外なのだが、彼はそれで、少しも怯まなまった。それならと彼は、赤いぼんやりしたものを、巨大に脹れた彼女の目玉に見立てて、彼の唇の動きを、その中心に向けて投げ掛けるようにした。それを間を置かず、何度も繰り返した。唾が溜まって、唇がピチャピチャ言うのまで楽しんだ。

しかしその内に彼は、自分が何を言っているのか、うわの空で、唇だけ動かしているのに気付かされた。そして、動き続ける唇の動きは、彼自身まるで理解できないデタラメだった。彼は唇を閉じた。するともう、自分が何を言っていたのかも思い出せないのだった。

彼は足元を見直していた。踏み出されたままの右足が、まだそこにあった。その右足を見据えたまま、上体を押し出して左足を踏み出した。すると白く照らされた汚れた床が現われ、そこを彼の左足が踏み締めた。また前を見た。

耳がもげて、斜めにゆっくり落ちてゆくように、彼女の二つの姿が、赤いぼんやりしたものから離れてゆく。ダルマが転がるように、しゃがんで膝を抱えたまま横に傾いて、そのまま透明な闇の中に霞んでゆくようだ。

青い顔は彼女のものだったが、黄色い方はもう彼女の顔ではなかった。何も見ない虚ろな目によって、青い顔は守られたが、黄色い方は余所を見ていただけ、無防備だったのかも知れない。その彼女でない顔は、彼女が考えた架空の

動物の顔だろうか。顔の色はみるみる濃くなって、細かいひび割れのような皺だらけの、いかにも分厚そうな弛んだ皮膚で覆われた。もう全身裸で、体中がその皮膚だった。腕をほどき、脚を投げ出して、彼の方に腹を見せて、横になって大きく伸びをした。反り返った体は、柔らかそうにぐんぐん伸びた。

明らかに目の錯覚と分かっていながらも、その腹の真ん中辺りに、真っ白い毛が纏まって綺麗に生え揃っているのを、彼は見た。目を見開いて、強くそれだけを見据えると、細長い動物の姿は掻き消され、白い光の分厚い塊が四角く浮き出て、彼の顔の右半分を強く照らした。右の視界だけが真っ白に吹っ飛び、その眩しさが彼の脳ミソを蒸発させるようだった。そしてそこに、紛れもない彼女の声が、滝の水が落ちるように流れ込んできた。

「ふーん、で、私はどこにいるの」

青い顔の彼女は、傾いていた体をすっかり立て直していた。しかし明らかに、ゆっくりではあったが、それは真っ直ぐ下に向かって落ちていた。直に汚い床にお尻が着いてしまう。彼は素早く近付き、その彼女の左腕の肘の直ぐ上を掴んだ。

掴んだような気がしただけだった。彼女の姿はなく、臍の形の真っ赤な窪みの奥に、彼は右手を突っ込んでいた。ゆるゆると引っ張り出すと、右手はドロドロのペンキで真っ赤だった。一生取れないような気がした。

直ぐに、窪みの皺皺が奥の方で捩れて、
「ふーん、で、私はどこにいるの」
という彼女の声がまたした。その残響が、暫く彼の頭をギリギリと締め付けて、突然崩れた。それは、彼の右手に、狙い澄ましたように落ちていった。そして、水を勢いよく吹き付けるように、赤いものを一気に洗い流すようだった。手が赤かったのは、ほんの一瞬だった。

しかし二度目のその彼女の声は、彼の耳に近過ぎた。声は、彼の耳の内側にべったり張り付くように残り、耳の中でゆっくり分解して、何種類もの動物の、彼女の声を真似た声色になった。もちろんどれも、架空の動物に違いなかった。

それから彼は、右か左か分からないが、どちらかに振り返った。そちらにしか、彼は振り返る事が出来ない。そのそちらには、彼が足を踏み出した時と全く変わらない距離に、赤いぼんやりしたものが浮いていた。もう耳はなく、その前と少しも変わっていないようだった。ただその中の何処かに、何種類かの架空の動物が飼われているようにも、彼には思えた。

まだ何も始まっていなかった。（二〇〇一年四月二十一日）

手首

そこにいる架空の動物の、全ての顔を合成すれば、彼女の顔になるのではないか。彼は先ず、飼われている動物の数が知りたくなった。赤いぼんやりしたものに向かって、人差し指を振り立ててさえすれば、それが数えられてしまうような気がする。そして、その数えられた数の中から、動物達の姿が現われそうだった。数は卵で、彼の手の中で温めれば、それが孵るようだった。

　直ぐにも、卵を取り出すべきだ。するといきなり、出来上がってしまった彼女の顔が、赤いぼんやりしたものと重なって、浮かび上がった。しかし、その口は冷たく結ばれていて、決して一言も口を利かない顔だった。それに口を利かせるには、動物達の声色を当てにするしかない。やはり先ず、その数を手に入れなければならない。それとも、その顔は、数えるのを妨げるために、出て来たのか。確かに、赤いぼんやりしたものの前に立ち塞がって、何処か威嚇するようではある。

　構わず、彼は数える事にする。右腕は、どうにも重い。肩まで冷え切っているようで、持ち上がりそうにない。糸で操られて跳ねるように、左腕が独りでに振り上がって、その人差し指が、彼の目の前に突っ立った。

　指は、そのまま真っ直ぐに縦に、見えない動物の姿に向かって、振り下ろされるだろう。しかしそれは、彼の意に反して、ほぼ真横に、左に向かって振ら

れてしまう。指の先に付いた、ネバネバした汚物を、振り落とそうとでもするように。それでも彼は、そのように腕を振っては、無言で、一つ二つと数え出した。

もちろんそれで、動物の姿が見えて来る訳もないが、新しい数が加わる度に、違う種類の動物が、鞭で打たれて、哀れっぽく叫ぶのを、聞き取れているように思えた。しかし、直にそれらは、どれも同じ種類の動物の声に聞こえてしまう。するとそれらは、全く彼の口から出されていたのだった。右腕が動くか試したがダメだったので、彼は、数えるのを已めて、左手を唇に当て、その五本の指で唇を掴むようにした。自分の口が、何かの動物の口になっていないか、確かめたかった。

しかし、その五本の指は、幾ら待っても、唇に触れて来なかった。左腕は、もう暫く前からか、左に目一杯振り払われたところで、そのまま、人差し指だけを誰かに掴まれて、動きが取れなくなっているのだった。数は、何時からか、或いは初めからか、右の人差し指で数えられていた。右腕は、時計のように正確に、測ったように垂直に、振り下ろされ、振り上げられている。しかし、そのように振られる事にだけ、全ての注意が振り向けられているようで、その上、数を数える余裕は、残っていないようではないか。その人差し指は、突き立てられてはいても、赤いぼんやりしたものの方には、少しも振り向けられていな

いようだった。
　もう、彼女の冷たい顔もなく、赤いぼんやりしたものが、すっかり安心しきったように、けだるそうに浮いているだけだった。とてもそんな中に、架空であるとは言え、動物などが、押し込められているとは見えなかった。
　どうして、そうなってしまうのか。彼は、振り下ろされる瞬間の、右腕の動きを止めてみた。手首から先が、なかった。先程の、彼女の声の残響が、右手の赤いペンキを洗い流した時、その彼の手の肉も骨も、一緒に溶かして、綺麗さっぱり落としてしまったのか。いや、ただ見えないだけだ。人差し指を振り立てている感覚は、確かなものだ。
　自分と赤いぼんやりしたものとの距離が、それまでと何処か違っているのに気付いた。近付いたようでもあり、遠ざかったようでもある。恐らくは、少しだけ近付いたか近付きそうになって、その分、横に逸れて、遠ざかったのだ。ただ、その遠ざかるにしても、その横に回り込めた分、それに近付けたようでもある。実際、遠ざかったのはごく僅かで、それよりずっと、横に、回り込めていなる。いとも限らない。そしてそれは、赤いぼんやりしたものの中に、架空の動物が飼われているように思えた時から、そうであったに違いない。
　横に逸れた分、彼は、赤いぼんやりしたものを、側面から見ている訳だ。たとえそれが、正面と、ほんの僅かズレただけのものであっても、側面には違い

ない。そう思って見直すと、彼の目には全く新しい、赤いぼんやりしたものが、そこに浮いていた。

赤いぼんやりしたものは、その幾つかの重なりだった。その境目に、彼の視線が、剃刀の刃のように切り込んで行くようで、それは、彼にも止められなかった。赤いぼんやりしたものは、結局、五つに分かれて、またそれぞれ、その正面をこちらに向けるようだった。五つを、一つと同じように見渡せるのだから、一つ一つは、それだけ小さくなっている。そして、その五つのそれぞれの前には、後ろ向きの彼の立ち姿が浮かんでいて、どれも、右腕を、振り下ろそうとするままだった。

その五人の姿が全て彼ならば、自らを五つに裂いて、それを、その五つの姿に、振り分けて行くしかないではないか。一人より五人の方が、色々と、出来ない事も出来るだろう。それは彼を、甘く誘うようだったが、五という数字が、すんでのところで、彼を引き戻した。そして、五つの彼の立ち姿が、彼の右手の五本の指に、ぴったり当て嵌まった。もちろん、指が見えた訳ではない。しかし、それらは指に違いない。見掛けに惑わされず、そう彼は見破れたのだ。彼は得意になって、自らの、黙り込んだままの、五つの後ろ姿を見渡した。彼の目を欺こうとしたものを呼び出して、見下してやりたい気分だった。

しかし、彼の目に映るのは、手首を切り落とされた先から、透き通った水が

零れ出す、振り上げたままの右腕しかなかった。咄嗟に彼は、右腕を下ろし、何も見なかった事にした。

全く手遅れだ。カラの金属の容器に、水がボトボト落ちて低く響くのが、耳の奥から突き上がって来るのを、止めようがない。見下ろすと、足元はすっかり水浸しで、その水溜まりは、盛り上がって、ツルツルと輝いて、内に秘めた力を漲らせているようで、彼の体は、その力によって、水の上に押し上げられているようだった。

その表面は鏡のようで、彼の姿を、くっきりとした色と形に映し出した。鏡に映る彼は、澄み渡った明るい光に包まれているようだ。水を通せば、全ては浄められるのか。鏡の中に、その彼の周りを一通り見て取って、そこに何もないのを確かめてから、彼はまた、鏡に映る自らの姿に目を向けた。

それは、鏡に映るからには、逆さまでなければならない筈が、頭が上に来ている。見えるのは、頭の天辺と、耳たぶの裏側の上半分と、両方のしなやかそうな肩だけだった。そして、それを見下ろしている筈の彼自らの姿が、消えている。足元には足がなかった。その足の上の胴体も、胴体にぶら下がっている両腕も、幾ら見直しても、見付からなかった。

彼は、左を振り向いた。左腕は、人差し指を誰かに掴まれていた筈だ。その人差し指だけは、そこに残されているのではないか。しかし、左を向いたのは、

水の奥の、真上から見下ろされる彼の姿だった。左を振り向いた筈の水の上の彼は、ただそれを見下ろすだけだった。
その水の奥の彼が、左の掌を見詰めている。その掌が、つい今まで、誰かの指を一本、握っていたような感触が甦った。しかし、誰の指を、どんな経緯で握る事になったのか、何も思い出せなかった。そして、その思い出そうとする彼は、水の奥の彼であるしかなかった。その彼は、その姿を見下ろされるままだったが、それを、水の上から見下ろすのは、もう、どの彼でもないのだった。
それでも、ボトボトと、水が落ちる音だけは止まらなくて、水溜まりがどんどん拡がって行くと、それに連れて、明るい澄んだ光の及ぶ所も、開けていった。見下ろされる姿のままの彼は、その拡がる視界に向かって、大股で歩き出していた。投げ出すように、右腕を真っ直ぐ前に振り出しては、なくした手首から、水を降り撒いていた。
一歩一歩が、ぐいぐいと力強く踏み出されるにしては、彼の体は、なかなか前に進まない。寧ろ、彼のその動きは、彼の頭の上の、水の表面に向かうようではないか。
そうして、水溜まりの表面が、遂に微かに震えて、そこで彼女の声がした。
「ねえ、どこいくの」
「なんだよ、そんな所にいたのか」

彼は、首を素早く真上に振り向けて、そう答えたが、その自らの声の調子を、平板で内に籠もっているように聞いた。

「わかった？」

とまた、水溜まりの表面が震え、彼女の声が、彼の耳に降り掛かってきた。その声は、決して、架空の動物達の、彼女の声を真似た声色ではない。しかし、語尾がひどくぼやけて、そこだけ聞くと、別人の声のようだ。動物の声色と、どちらが増しだろうか。語尾だけでなく、初めからだったら、こちらの方が耳障りだったろう。

「そりゃ、声がすれば分かるよ」

自分でそう言っておきながら、どうして声がすれば分かるのだろうと、彼は思った。

「なんで、声がすれば分かるの」

と、彼女の声がしたが、水の表面は震えず、その声が何処から来るのか、よく分からなかった。その声は、初めから別人の声のような調子だったが、語尾がぼやける事もなく、彼の耳にすんなりと入った。

水溜まりが、透き通ったまま、みるみる赤くなって、その下の彼の姿も真っ赤に染まった。その赤みが、彼の骨の髄まで染み通るのを、じっと待つように、そのまま暫く、彼は真上を見上げたままでいた。そして、その真っ赤になった

骨の髄から、声を絞り出すような気持ちで、
「何処にいるの」
と、聞いた。それは、やはり彼の耳に、余りに平板に聞こえて、本当に何か、平らな板でも吐き出した気分になった。そしてそれは、ただの気分よりは、もう少し確かなものかも知れない。その声が、水の表面に音を立てぶつかって、水を震わせたからだ。

それで出来た、小さな波の拡がりが、あちらこちらで跳ね返って、更に細かく刻まれていった。暫くは、何の音もしなかったが、その入り組んで混じり合う、小さな波のうねりの中から、微かな響きが湧き上がった。その響きと響きが擦れ合う中に、彼女の声を聞き取った。彼は、その中で、グングン伸び上がって、甲高い彼女の笑い声になった。それは、彼の耳の中で、グングン突き抜けて、水溜まりまで届き、また水を震わせた。その笑い声が、彼の脳天を突き抜けて、彼女の笑い声となって戻ってきて、ずっと、それが繰り返されるようだった。

彼は、真上を見上げたまま、両手で、強く耳を塞いだ。その、見下ろされた見上げる彼の顔は、頬の筋肉がつり上がって、目の形を歪め、乾いた唇が曲がって開いたまま、絵のように止まっていた。

水の下に沈んでいる、陶器のカケラにでも描かれた、小さな絵を、見下ろし

ているようだ。そんな気がして、やっと彼は、自分で自分の顔を見下ろしているなんて変ではないか、と気付いた。

　彼女の笑い声が已んでいた。静けさの、伸び上がる尖った響きが、目に見えるもの全てを縛り付け、行き場を失って、その場その場で、更に何処までも研ぎ澄まされて行くようだった。右の耳を塞いでいる右手が見えた。手首の先に、また手が生えている。彼は、その掌を高く翳して、赤いままの水面に触れた。見下ろされる彼の姿が、その赤みに溶けて消えた。

　彼は、替わりの自らの姿を、何処かに見出さなければならない。彼は、水の中に落ちていった。その彼の身の丈より、水はずっと深かった。水の中で、赤いぼんやりしたものが、五つ、離れ離れに浮いている。

　彼は、右手の指を思い切り拡げて、目の前に翳し、その赤みが目に入るのを、防ごうとした。五本の指一本ずつが、それぞれ一つの赤いぼんやりしたものを遮った。しかし、そう何時までも、指を目一杯拡げてはいられない。震えながら、指と指の間が狭まって来る。すると、その指にくっついてしまったように、五つの赤いぼんやりしたものも集まって来て、互いに重なり合うようだった。

　一斉に、架空の動物達の、彼女の笑い声の声色が湧き起こって、五つが一つになった。声は直ぐ已んだ。一つになって破裂するように、一つのまま、それはまた、彼から遠ざかった。右の手首から先がなかった。二度と生えてこない

ようだった。遠ざかって、また同じような距離に浮かぶ、赤いぼんやりしたものの中に、白い掌が一枚、小さくポツンと浮いていた。

まだ何も始まっていなかった。（二〇〇一年五月二十一日）

肉片

白い掌は、架空の動物達の声色の残響を、僅かに掬い取っているようだった。その周りを、動物達の舌が取り囲み、その掬い取られたものを、寄って集って、ベロベロと舐めていた。全て綺麗に舐めてしまうと、その甘さに大いに満足したように、その何枚もの舌ビラは、赤いぼんやりした中に消えた。ザラザラした舌の感触が、まだ残っているのか、白い掌は、更に白くなって、それを振り落とすような動きを繰り返した。

その動きは、とてもぎこちなく見えた。そんな事をしていたら、弾みで、掌そのものがそこから振り落とされてしまうように、彼には思えた。彼は、右腕をそちらに伸ばすようにして、なくした手首を捻るようにした。掌を、彼の方に向けさせたかったが、掌の動きは、何も変わらなかった。それで彼は、手のない右腕の先を、口元に寄せるようにして、なくした掌の辺りに、長い息を、

何度も吐き掛けた。そうする内に、右腕も、息を吐く口も、何処かに紛れて消えた。彼の姿が、もちろんまだ、消えたままであれば、どうする事も出来ない。ただ、息を吐き掛けられていた掌の感触だけが、微かに残るようだった。彼は、全くその感触だけによって、自らをそこに繋ぎ止めておけるように思えた。

　その掌の感触は、行き場を求めるように、上を向いて、少しだけ反るように捩れた。それで、直ぐに厚みを失い、みるみる小さくなって、一つの点のようになって、消え掛けた。そのまま消えたら、彼も消えてしまうのだろうか。しかし、その一点は、掌の中心の感触に違いなく、ゆらゆらしながらも、しぶとくそこに残った。

　赤いぼんやりしたものの中の、上を向いていた白い掌が、そろそろと起き上がるように、彼の方を向いた。離れているのに、その一点の掌の感触が、赤いぼんやりしたものの中の掌まで伝わって、その一番窪んだ辺りをそっと撫でさすりながら、そこに染み込んで行くようだった。掌の表面は、磨き上げた金属のようにつるつるだった。そこに、まだ姿のないままの彼が、何処からか、唾を吐き掛けたようだった。唾は、掌の表面を弾けるように、掌全体にパッと拡がって、掌の感触の後を追うように、残らずそこに染み込んだ。その唾の染み込んだせいで、掌の白さが、白いままに、その奥の何処かで、黒光りして行くようだった。その掌の黒光りが、表面の白に取り込まれて行くと、掌の表面は、鏡

になって、薄ぼんやりした闇だけを映して、混じり気のない鈍色を滲ませた。

　彼は、自らの姿を映し出そうと、そこに向かって、飛ぶように近付いた。その彼から逃げるように、掌は、くるりと裏返った。手の甲は真っ黒だった。その黒さは、それを取り囲んでいる赤いぼんやりしたものを、一瞬の内に、掻き消した。辺りは、真っ暗になり掛けた。しかし、その中に先ず、手の甲だけが、一際黒く輝いて浮き上がり、向こうを向いた掌から、赤い光が流れ出ていて、その先を照らしているのが見て取れた。

　それなら、その照らされる中の何処かに、自らの姿がなければならない。そう思って、彼はそこを見た。仄かな赤味を感じ取れるようではあったが、幾ら見ても、後はただ真っ暗なだけだった。しかしそれで却って彼は、その真っ暗な方へと、ぐいぐい惹き付けられ、黒い手の甲の側まで、真っ直ぐに近付いて行けた。そうして、身を潜めるように、手の甲に張り付いた。直に、彼は、その黒い輝きにすっかり取り込まれ、手の甲の中に溶けて消えた。

　手の甲の中で、彼は、遠く微かに、架空の動物達のお喋りの声を聞いたかも知れなかった。手は、思いの外厚く、彼は、砂漠を抜け出そうと闇雲に歩き回るように、暫くその中を彷徨った。動物達のお喋りの、声と声が重なるようだと、そこに彼は、彼女の声を聞き取ろうとした。しかし、聞き取れる前にそれは、手の中を巡る血に溶けて、流れて行ってしまうのだった。

どれ程、時間が掛かったか分からないが、やっと彼は、手の肉を染み通って、掌の側に出た。そこはまだ赤い光を発するままで、彼自らも、その赤い光になったかのようだった。そうして彼は、手の甲の後ろからは見えなかった、掌の先にあるものと、向き合った。明らかにそこには、何かがあった。その姿は、紙のように薄い赤い輪郭を浮かび上がらせるだけだったが、何種類かのものの共が、そこに集められて、一塊りになっているのは、分かった。

それらは、見る方の気分次第、思い込み次第で、どのようにも見えてしまいそうだった。それならそれで、彼に見えるままに見るしかない。

それで彼は先ず、その一番上の、一番長く、一番起伏に富んだ輪郭だけを、なぞる事にした。そうして、何度かなぞったが、どうしても、見覚えのある形を掴み取れない。しかし、同じ事を繰り返す他に、何一つ出来ないのだ。そうしていると、動物達のお喋りの声と声の重なりが、先程よりも、随分と角の取れた調子で聞こえて来た。声を溶かした血が、彼の中を一回りして、また掌に戻って来たに違いない。ただ、それは滑らかか過ぎて、全く動物の声と声の絡み合いでしかなく、そこから彼女の声を聞き出せそうにはなかった。声はそのまま、掌から出る赤い光に乗って、輪郭の方に流れ出した。

するとその、一番上の、一番長く、一番起伏に富んだ輪郭は、しゃがみ込んで、首だけ高く持ち上げた、大きな駱駝だった。その直ぐ前に、隆々とした筋

骨の牛が、水を飲むように首を項垂れていた。その足元に、痩せた仔山羊がいて、その胴に、小さな猿が、長い両腕を回して抱き付いてぶら下がっていて、その猿の腹の辺りを、綺麗な色の縞模様の小さな蛇が忙しく這い回っていた。蛇は、そこから落ちないでいるためには、決して這い回るのを已めてはいけないかのようだった。それを何度か見直す内、その五種類の動物の形だけで、全ての輪郭の説明が付いていった。初め、はみ出していた線も、それらの動物達の姿の、どれかの輪郭に収まった。すると、輪郭は、みるみるぼやけていった。彼は、自分が、水の中に落ちて行ったままであるのを、思い出した。

慌てて彼は、その輪郭を掌で掴み取ろうとしたが、掌はぴくりともせず、彼に出来る事は何もなかった。そうして、それはまた、赤いぼんやりものになってゆくようだった。ただその中を、もやもやしたものが、ぐるぐると動き回っていた。掌の光を受けて、その輪郭が浮かび上がると、それは、風にそよぐ彼女の襟髪にそっくりで、まだ下の方から、雲のようにモクモクと湧き起こるようだった。しかし、上の方では、それは、風に千切れて飛ばされて行くようで、髪の形や量は、少しも変わらない。それは、赤くも黒くもなくて、ただ髪の毛の柔らかい感触のようだった。

それでも、少しずつ髪は艶を増して、その艶が周りの水気を吸い寄せて、濡れて行くようだった。その中に、幾つか小さな水滴が出来て、それらが次第に

集まって、大きくなったものから順に、ボタボタと下に落ちた。しかし、ここが水の中なら、それらは気泡ではないのか。それとも、赤いぼんやりしたものの中だけは、寧ろ水が入らないのだろうか。やはり、どう見ても水滴だった。どれも、拳程の大きさに見えた。ボタボタと音はするが、その下には床も何もない。赤いぼんやりしたものは、底が抜けていて、そこから、水滴は、何処までも真下に向かって、落ちて行く。それでも、ボタボタと、大きく響くような音だけはする。その音に耐え切れないかのように、彼女の襟髪の感触に似たもやもやしたものは、少しずつかすれて、消えていった。ただ、形は消えても、その髪の感触だけは、ずっと何処かに残って行くようだった。

掌が、すっかり俯いていた。彼は、赤いぼんやりしたものの中の何処かに浮かんでいて、そこから、水滴が落ちて行く先を、覗き込んでいだ。彼は、掌ごと、水滴と共に、そこへ落ちて行った。

掌は、真下を向いていた。そこから差す微かな赤い光が、その先を落ちて行く水滴を照らし、水滴は次々と、闇の奥から彼の方へと、引き寄せられた。そうして一度照らし出されれば、それらは、落ち続けながらも、ずっと彼の側に留まるようだった。

その内の一つの中に、厚みのある赤いものが動いているのを、見たように思えた。ただ、光に照らされた水滴はもう、かなりな数になっていて、それがど

の水滴の中に見えたかは、分からなくなってしまった。それを探し当てようと、次々に水滴を見て行くと、その中のどれにも、白いものが見えて来た。白いだけで、形はもちろん、厚みがあるかどうかさえ、分からい。それでももし、それらが水滴から取り出されて、独りでに重なり合って行けば、そこに彼女の頬の感触が滲み出て、遂には、彼女の頬の形まで描き出しそうだった。

しかし、なぜ頬なのだろう。どうせなら彼は、耳の形が欲しかった。それがあれば、彼は何時でも、彼女に声を掛けられるだろう。それに、水滴の中の白は、彼女の頬と比べて、明らかに白すぎる。他のものを寄せ付けない白さだ。それで、頬が描き出されても、その頬は何も寄せ付けず、彼女の顔の他の部分とさえ、繋ぎ合わさる事がないだろう。

何とか彼は、別の種類の水滴を見付けようとした。そうしている内に、少しずつ水滴の数が減っていった。なくなった水滴は、何処へ行ったのか。見回すと、掌の直ぐ脇に、先程の仔山羊が、尖った口をこじ入れていて、その先から白い舌がちょろちょろと出て、水滴を舐めていた。彼に見付かると、口は、舐め掛けの水滴を吐き出して、素早く引っ込められた。

その吐き出された水滴には、白いものが見えなかった。その代わりに、色も形も分からない何かが、動いていた。それをもっとよく見たかった。するとそれは、掌の直ぐ前に来て、そこを動かなくなった。それだけが、掌の光を間近

に受けた。その真ん中の辺りに、短い裂け目があって、ぴったり閉じ合わされているようだった。しかしそれで、掌の光が遮られ、他の水滴はどれも、闇の奥の方に、小さくなって消えて行くようだった。

　中に一つだけ、幾ら闇の奥に遠ざかっても、同じ明るさのままのものを見付けた。それはもう、殆ど一つの点のようだったが、彼は、その中に、厚みのある赤いものが動いているのを、確かに見て取れるのだった。そしてそれは、彼女の唇の形をしていた。形がはっきりした分、赤味が少し収まるようだった。

　しかし、掌から出る光は弱いのに、どうしてそんな先まで照らせるのだろうか。掌の直ぐ前の水滴が、レンズの役割を果たしているのではないか。掌はもう、その水滴の中に、すっぽり取り込まれているようでもあった。

　そうに違いない。なぜなら、その中の色も形も分からない何かに、触れる事さえ出来そうだったからだ。そして、閉じた裂け目が何であるか分かった。それは、遥か先の、やはり閉じ合わされた唇と同じ形をしていた。それは、唇の裏側だったのだ。色も形も分からないその周りは、唇を囲んでいる口の筋肉ではないか。彼の白い指が、そこを、ゆっくりと真横になぞった。裂け目が微かに開くと、遥か先の唇も、ほんの少し歪むようだった。

　しかし、それでどうなるものでもない。たとえ、彼の指が、彼女の唇を自在に動かせるまでになったところで、彼が得るものは、何もない。唇は、自らそ

の表情を一切打ち消して、ただの肉片と同じになってしまうだろう。彼は、切り取られた自らの右手が、彼女の喉と舌に変わってくれないかと思った。そうして、その喉を震わせ、舌を、出したり引っ込めたり波打たせたりすれば、唇も自ずと開いて、彼女の声を、どのようにも出せるだろう。

いや、それを聞き取る彼の耳が、ないではないか。彼の姿はまだ、何処かに行ってしまったままだ。それよりも、遙か先の彼女の唇を照らす事が、疎かになっていないか。それはもう、見失われてしまっていないだろうか。改めて彼は、そちらに掌を翳し、レンズ越しに光を当てた。それは、全くただの赤い点になっていた。そこに確かに、彼女の唇の形があるのは分かるが、果たして、その形をちゃんと、そこに見て取れているかどうかは、もう定かでなくなっていた。彼は、他の事は一切後回しで、ただそれを照らすだけに専念しなければならなかった。

その甲斐があって、赤い点は少しずつ、彼の方に近付いているようだった。それを取り囲む闇だけが、次々と振り払われて、奥の方へと落ちて行く。しかし、点は幾ら近付いても点だった。ただ、その点の奥の闇に、微かに赤味を帯びた平面があって、それが点と共に遣って来るようだった。

まだ何も始まっていなかった。（二〇〇一年六月二十一日）

切り口

赤い点が、もう直ぐそこまで来て、見失われた。近付き過ぎたからに違いない。彼の中に入り込んだか、彼を擦り抜けて後ろに去ったかの、どちらかだろう。彼の前には、仄白い平面だけが、立ち塞がっていた。赤味は消えていた。闇は、それにすっかり遮られたが、消えた訳ではない。仄白さの中にたっぷり含まれているようだった。それとも、その白さが、闇のようでもあった。

その闇に誘い出されるように、赤い点が、またふらふらと、彼の前に現れた。しかし、それは、点にしては何処かぼんやり脹らんでいて、透けているようでもあった。その影が、壁に映った。壁を白く照らしているのは、彼だった。赤い点は、二つに裂けて消え掛けた。影も、二つに分かれたが、影は、そのまま濃さを増し、脹らんで行った。

彼は、口から水を吐いた。口は、閉めようと思っても閉まらない。水は、彼の口を一杯までこじ開けたままの、太い一本の棒のようだった。少し前屈みになる以外、どうする事も出来ない。水は、足元の或る一点に向かってだけ、音もなく落ちていて、そこで、青く光る微かな煙になって、蒸発していた。ここはもう、水の中ではないのだ。

　彼は、自らの体を取り戻していた。右の手首から先だけが、なかった。そのなくなった手首の辺りを見ていると、急に頭が重くなり、背中が丸まり、腰が丸まり、膝が折れ、尚、水を吐きながら、頭はどんどん下がって行く。そして、煙を出している一点に届くと、そこで水は止まった。しかし、口が開いたまま、頭は更に落ちて、遂に唇が床に着いた。頭と足以外は、伸縮自在のふにゃふにゃの素材で出来ていて、その中身も空っぽのように感じられた。頭の重みを支えるために、歯を立てて、床を噛んでいた。顎にだけ力が漲って、彼は、そこをガリガリと齧り出した。

　自ずと首が左右に振れ、頭と同じくらいの穴がそこに開いた。穴の底の柔らかいものに噛み付くと、彼の頭は半回転して、それを穴の外に放り出した。それは、彼の右手で、放っておけば、そのまま少しずつ、滑って離れて行くようだった。しかし、それはひどい痛みを伴った。足を踏み鳴らす以外、どうする事も出来ない彼の代わりに、二つに裂けたままの赤い点が降りて来て、手の甲の中に染み通って、やっと手は止まった。

　頭は、床の穴にぴったり嵌り込んでしまった。その頭を起こそうとすると、床ごと持ち上がった。手はまた、何処かへ滑り落ちて行くしかなさそうだが、痛みはなかった。耳の奥で、足音がノロノロと響いた。彼はまた、仄白い平面と向き合った。二つの影は、そのままだった。そして、彼を待っていたかのよ

うに、動き出した。影は、踊るように色々に形を変えた。彼は、自らが光を失った事に気付いた。光は、その平面の方から来た。影が動いて、その平面の白も動くと、それが彼には眩しかった。白の中の闇は、見失われていた。

二つの影は、人の形になってゆくようだった。それでも二つは、その場で腰を振って軽い足取りで歩くように、動き続けた。いや、一方は、ただじっとしていて、重そうだった。動いている方は、ほっそりしている。中で、透明に光る点のように小さなものが、一つ、チカチカしている。動かない方は、少しずつ身が引き締まって、厚みを獲得して行くようだった。ほっそりしている方は、その変化に引き寄せられるかのように、そちらに傾いた。そうして、二つが触れ合う瞬間、厚みを獲得した方は、その場でその平面を割り裂いて、その奥へと身をねじ込ませて行った。始め、直ぐにそれは、押し返されるようだったが、影は、それで愈愈、厚みを増し、力尽くで、そこをこじ開けて行った。その体付きは岩のようで、それと同じ幅の裂け目を、平面の上に作った。それが、すっかり平面の奥に収まると、ほっそりしている方も、それと触れ合ったまま、後に続いた。裂け目は、傾きながら、ほっそりしている影と同じ幅まで狭まって、最後には、殆ど閉じ合わさるようだった。ただ、微かに覗くその奥は、表面の白より、ずっと白く激しく輝いた。

彼は、後に続きたかった。いや、そうしたかったかどうかは、もう一つはっ

きりしない。しかし、他に彼は、何をしようと出来ただろうか。その奥の白さに身を晒そうとしないのであっても、そこに少しでも近付いて、その白さが、彼を拒絶するための白さであれば、その場で息絶えるしかない。いや、予め、その白さを目の当たりにする事が分かっていたら、彼は、全てを了解した上で、その場に踏み止まったのではないか。しかし、彼は、まだ何一つ了解出来ていない。いきなり息が絶えそうなら、ただそうならないように、何かをしようとするしかない。しかし、彼は、垂直に起き上がってしまった床の中に、頭を嵌り込ませて、身動き取れないのだ。そのまま前に進もうとするのは、この星の重さを丸ごと身に負うようなものだ。しかし、まだ、是非見て取らなければならないもののために、ここで息絶える訳には行かないなら、その重みを、自らに担わせるしかないだろう。

彼は、そうしようとしていた。しかし、それによって引き起こされるのは、平面が少しずつ、左右から、その裂け目の中に吸い込まれて行く事だけだった。裂け目の幅は更に狭まり、奥の白は、ますます細身になっていった。

しかし、この星の重みに締め付けられているのは、頭だけではないか。首から下は、どうなのだ。首吊り死体のように、ただ役立たずのまま、ぶら下がっているだけか。切断された右手はどうなったのか。いや、右手だけは、もう望み薄だ。それは、この星と目の前の平面の間の、何もない所に投げ出され、そ

こを何処までも落ちて行っているに違いない。そうして、右手はただ、彼と、彼の直ぐ目の前の白との間に、底なしの隔たりがあるのを、彼に思い知らせるだけだ。

いや、そうなら、彼の手首の切り口は、切り離された手の切り口と一対をなして、その間に、その隔たりを挟み込んでいないか。落ち続けるもう一つの切り口が、決して見て取れない遥か先の何処かで微かに揺れれば、それは必ず、彼の手首の切り口に跳ね返って来るのではないか。そうして、その切り口だけは、何か、役に立っているようではないか。

右腕が、ゆるゆると持ち上がって行った。すると、平面の裂け目が、彼の方に、呆気なく近付いて来た。平面の左右の端が見えて来た。いや、それはどちらにも外側に巻き込まれて、その一番の端は、その巻き込まれた中に隠されていた。それが左右から彼に迫り、差し出された右腕を両側から挟み込んで、もう殆ど閉じて、その間の白の見えなくなった裂け目へと導いた。そうして、その両端が裂け目に吸い込まれれば、同時に、右腕も、その奥へと引きずり込まれるしかない。しかし、彼の体の中で、その平面の動きに応じているのは、右腕だけで、他はふにゃふにゃの空っぽのままだ。右腕は、もぎ取られるしかなかった。そして、平面が全て裂け目の奥に収まり、彼の目の前には、何となく閉じ合わされただけのような、何とも貧相な裂け目だけが残った。そこに手を掛

けさえすれば、何時でも拡げられそうだったが、たったそれだけの事が、彼には、他の何にも増して、最も遠い、どうにもならない事に違いない。奥の白は、もう覗いていなかった。

　右腕を失った彼の体は、バランスを失って、左に傾くべきだった。しかし、彼にはそれが出来ない。それが、彼には耐え難いのだった。彼は、頭を前に振り出した。頭の後ろ半分はまだ、この星の重みに締め付けられるままだったに違いない。それなら、頭は、前と後ろと、真っ二つに裂けたのではないか。それでも構わず、彼は、口を大きく開けて、振り立てた頭前半分を、自らの左の肩に振り下ろして行った。そうしてそこに噛み付き、肩から左腕を噛み切った。

　腐臭がした。左腕は、もう腐っていた。もう少し遅れれば、その毒が、体中に回るところだった。その腕は足元に落ちた。と言っても、足は直ぐそこだった。ただその床は、垂直に起き上がったりしてはいないようだった。頭から見れば、垂直なようでも、足にしてみれば、床は、水平なままに違いない。左腕はそこに落ちた。そして、彼の両足は、まるで左腕を憎んででもいるかのように、それを蹴り出そうとするのだった。しかし、そうしようとする程、左腕は、足の下に潜り込んで来た。

　その内に左腕は、肉が潰れて、ドロドロになって行った。彼の目は、それを直ぐ先に見ていた。彼は、口の中がカラカラに渇いていた。水を吐いたからに

違いない。それで、そのドロドロの肉を啜りたくなった。頭の前半分を、引き剥がして飛び出させた彼であれば、そこに口を持って行く事など、訳ないではないか。しかし、そこは途轍もなく遠く感じられた。もちろん、それは、垂直の世界から水平の世界へと、飛び移らなければならないからだ。いや、もしそう出来たとしても、それがどういう末路を辿るかは、このドロドロがはっきり示しているのではないか。

まだ何も始まってはいなかった。(二〇〇一年七月二十一日)

期待

彼が二人居て、垂直と水平の二つの世界に身を置くなら、彼は彼のまま、別別に、それぞれの世界の中を、思うままに動き回れるだろう。しかし、そこに彼は、どうしようもなく、一人でしか居られないようだ。一人でしか居られないばかりに、二つの世界に、頭と足を突っ込まなければならないに違いない。二人の彼が居られたなら、世界は寧ろ、一つのままだったのではないか。二人の彼が、それぞれの仕方で、一つの世界を用いて、ばったり出会したりしないように、巧く遣れば、それで済んだ筈だ。

ただ、彼の前に立ち塞がる平面は、その裂け目に吸い込まれてしまっているのだ。それでもう、垂直か水平かは、その閉じ合わされた裂け目からしか、見極めが付かないのだが、平面がなくなって、平面の裂け目だけが、あり得るだろうか。それは、平面の裂け目ではないし、そもそも、裂け目として、そこにあり得るだろうか。ただ、それらしく、思い浮かべられるしかないのではないか。それなら、それとどう向き合うにしろ、垂直とも水平とも、言いようはない。垂直も水平もないなら、床は、ただ一面の床であって、世界もまた、そこに一つある切りではないのか。

いや、残念ながら、そうではなさそうだった。なぜなら、足は、踝から上がなかった。ただ、足の甲だけが、ツルリと二枚並んでいるだけだ。そちらの世界には、そこから先がない。後は、ドロドロになった左腕の肉が、床を濡らしているだけだ。では、こちらの世界はどうかと見ると、なくなっているのは、両腕ばかりではなかった。首から下が、綺麗さっぱりなくなっているではないか。相変わらず、頭の後ろ半分は、床の穴の中に嵌り込み、お面のような前半分が、そこからべろりと起き上がっていて、その二つは、顎の下で繋がってはいる。しかし、それだけだ。

だからと言って、その頭と足の間が、すっぽり抜け落ちてしまっている訳ではない。それは、間違いなく、そこにある。寧ろ、頭や足の方が、余程怪しい。

頭と足は、その相容れない二つの世界に、彼がちゃんと繋がっているのを示すための、ただの印のようにも見えて来る。それなら、そちらもこちらもない。二つの世界は、見る側か見られる側かによって、隔てられているのではない。二つの世界の間に居る彼が、その二つを、蝶番のように、結び合わせているのだ。

しかし、そうであるなら、彼は、そのどちらの世界にも身を置いてはいないのだ。彼がそこに身を置いていないのなら、そこは、彼にとって、もう世界ではない。その間の、彼の居る所が、ただ一つの世界であるしかない。では、その彼の世界の中で、彼が、結び合わせている二つのものは、何か。彼の世界に属さない、何ものかであるしかない。それなら、彼の頭と足は、彼の世界が、その外と触れ合うための、裂け目のようなものか。そうかも知れない。

しかし、全くそうでないのかも知れない。それは、どのようにも考えられるのではないか。ただ、その二つに挟まれて、彼が、その二つを結び合わせる蝶番のようであれば良いのだ。つまりは、それが何であったところで、構わない。では一体、何が、構わなくないのか。

もちろん、彼がどうなっているかだ。先ずは、彼の体が、何処でどうなっているかだ。いや、それなら、彼の体は、彼の体のある所で、彼の体であるしかない。他にどんな答えがあるのか。

彼はそこで、つるりとした彼の体だった。どんな鋭い刃を立てても、必ずそれは、ただ横に滑るしかなく、決して、彼の体を、切り分けたりは出来ないだろう。上から下まで何処も、切り離されてもいないし、剥がれ掛けてもいない。右の手首の先までもが、ちゃんと、五本の指のある白い手が、くっついていた。そして恐らく、彼は、そこに立っている。寝てもいないし、しゃがんでも、腰掛けてもいない。他のどんな姿勢も取っていない。それなら、立っているしかないだろう。それとも、自分でも分からない、全く新しい姿勢でいるのか。

他に、ここには、何があるだろう。床はなくなっている。だから、頭を締め付ける穴も、ドロドロに溶けた左腕もない。平面を呑み込んだ閉じ合わされため裂け目も、見当たらなかった。

他に何もなくて、彼の体だけがあって、それでどうなるのか。そのようにして、そこにあるだけの自らの体でしかないなら、それを切り刻みでもしない限り、何も変わらない。切り刻みたかったが、他に何もなくては、切り刻める筈もない。いや、切り刻んで、どうなるのか。それで、血や肉や骨が、バラバラになって辺りに散らばれば、どうにもならない自らが、それだけ、押し拡げられて行くだけだ。そんな事なら、どうにもならないままの方がマシではないか。いや、そんな理屈に用はない。彼は、どうしても、何も欠けていない自らのつるりとした体が、耐え難かった。切り刻めないまでも、何処か一ヶ所でも、ス

ッパリとした傷口が欲しかった。
それには、何が必要なのか。何でもいい。取り敢えず、とにかく体を動かして、何かに触れる事から始めるしかない。しかし、体を動かしているようでも、体が動いているかどうかさえ、分からない。そんな事で、何に触れているかなんて事まで、分かるだろうか。しかし、そのようにして彼は、動いているかどうか分からない自らの体によって、触れられているかどうか分からないものに、確かに触れていたのだった。その感触も色も形も、分かる筈はないが、元々そのようなものに違いなく、分からないままであればこそ、それに触れていられる訳で、もしその色や形が分かるなら、それはまた、別のものだ。
　そして、触れていられるなら、彼は、それに向かって、働き掛けられるに違いない。と言っても、彼に出来るのは、それに働き掛けられると、思い込む事くらいだ。さて、そう思い込んでみて、それは、何か変わっただろうか。それは、丸ごと彼に跳ね返って来た。つまり、そのようにして、彼は、ただ自らに働き掛けたに過ぎないのではないか。そうであるなら、それは、自らがつるりとした体である以上に、耐え難いようでもあった。なぜなら、何かに触れていられたと思えただけで、彼はただ、つるりとして耐え難い自らにしか、触れられていなかったからだ。いや、それもよくは分からない。はっきり耐え難いと分かるなら、身を捩る事も出来たかも知れないが、彼は、どうしていいか分か

らずにいるしかなかった。
　その彼を、ぼんやりと脹らみ掛けた赤い点が、何処からか、見下ろしていないだろうか。それは、決して彼の届かない所にあって、さも得意げで、その得意なのを彼に分からせるために、赤いのかも知れなかった。もちろん、彼は、それを見て取りたかった。そのために、つるりとした体は、グルグルと回るようだったが、回る程に、その場で深みに沈み込み、赤い点から遠ざかるようでもあった。いや、遠ざかるだけなら、彼はそれを、遠ざかるものとして、確かに見て取れたのだ。それは、遠ざかっただけ、彼に近付いて、彼に付き纏うようでもあり、そうなっては、それは、愈愈分かり難いものになるだけだった。彼には、それは、決して、そのままにはしておけないものだった。それでも、それをどうにも出来ないなら、それに代わる他の何かで、どうにかするしかないではないか。
　彼は、目の前に、白いものを見て取っていた。それによって、赤い点をどうにか出来る訳ではない。しかし、それによって辛うじて、彼は、その赤い点に付き纏われるようでありながらも、彼で居られるに違いない。それは、そこでなく、彼が、何かに触れようとして、直に目で触れられた最初のものだ。目だけでなく、彼はそれに、手でも触れようとした。その努力は全くムダだったが、その白いものの周りを、うっすらと赤くする事が出来た。それが彼に何を齎すかは、

分からなかったが、幾らかは満たされた気分を味わえて、まだまだ、出来る事がありそうに思えるのだった。その出来る事を引き出すには、また、白いものに、係わろうとすべきだ。他に仕様はない。改めて、その白いものを見詰め直すと、待っていたかのように、それは動き出した。ただ丸っこくなったり、角張ったりを、繰り返すだけのようだったが、幾ら見続けも見飽きないばかりか、そこから目を背けられなくなってしまったようだ。ただ、そうであっても、それはそれだけの事だ。問題は、それによって、彼と赤い点との係わりが、どうなって行くかだ。白いものの動きは、その周りのうっすらとした赤味さえ揺さぶって、そこに濃淡を描き出す程なのに、赤い点だけは、何処か決して見付からない所に、押し隠されて行くようではないか。

いや、その押し隠されているのは、果たして赤い点だろうか。まるで、そうでないものでも、ありそうではないか。それを確かめられるとしたら、やはりまた、白いものに頼るしかない筈だが、その白いものの中には、もう、そんな彼の期待に応えられそうなものは、何も残っていないようではないだろうか。しかし、その繰り返しの動きは、彼を捕らえて放さないままではあった。

彼は、口が渇いていたのを、思い出したが、どうやら、もう渇いていないようだった。それならと、口を開けっぱなしにして、口の中の唾液を蒸発させようとした。しかし直に、自分が何もしていないのに気付かされるだけだった。

白いものの動きは、そんな彼を嘲笑っているように見えた。彼は、その嘲笑っているように見える事に、目を瞠った。するとそれをまた、嘲笑われているようだった。それを手掛かりに彼は、その白いものの間近にまで近寄れたのではないか。彼は、その白いものの真下に、身を滑らせたのだ。そこでまた、彼は、嘲笑われて、大いに満たされた気分に浸るのだった。

　その反射を受けて、彼の体も、仄白く見えているに違いない。もしそうなら、あの裂け目の中に消えた白い平面のように、その白さの中には、闇がたっぷりと含まれているだろうか。それとも、白いものに近付いて、却って彼の体は、暗く沈んだ色に見えているだろうか。もしそうなら、その色は、闇を弾いて、彼の体を闇から浮き上がらせているだろうか。いや、どちらでもなさそうだった。なぜなら、彼はもう、闇とは切り離されているようだったから。

　まだ、何も始まっていなかった。（二〇〇一年八月二十一日）

偽物

彼は、自らの体が、その白いものの前に、隅から隅までくっきりと、剥き出しにされて行くのが分かった。ただ、剥き出しにされる程、その色も形も愈愈、

見て取れそうになくなるのだった。その自らの体の、何処の何に目を向ければ、それが色なのか、形なのか、まるで見当が付かない。しかし、どうしてそうなってしまうのかは、思い当たった。そこから、闇が、綺麗さっぱり消し去られているからだ。或いは、消し去られているのは、闇ではないのかも知れない。いや恐らくは、闇をも易々と含む、闇を闇のように見せるものまでが、消し去られているのだ。しかしそれなら、彼の前にあるものが白いかどうかも、分からないのではないか。

　彼は、それを見直そうとした。見て取れただろうか。彼の前に、確かに何かがあって、それがそこにあるのが確かであるためには、先ずそれは、必ず白くなければならないようだ。それが、彼に知れる、その白さの全てで、それは、光の中に浮かび出る白い色とは、まるで違っている。それが白いかどうかではなく、それは、彼のために白くなければならないのだ。つまり、その白は、偽物なのだ。或いは、偽物でないかも知れないが、偽物と言われてしまえば、それを覆す材料はない。そして、それをそのようなものと分かっても、彼に出来るのは、その偽らしき白に縋り付く事だけだった。

　いや、それは、偽の白でなければならないのだ。もしも、光の作用である本物の白が、彼の前に現れたりしたら、彼の体は、その白の孕む熱に貫かれて、燃えて、直ぐにも消えてなくなってしまうだろう。彼は、安心してその偽の白

に、身を差し出した。すると、そこにはもう白いものはなくて、ただ偽の白と、その白に溶けて、白いものとなって、そこにただ一つある、彼の体があった。彼の体だけがそこにあるなら、もう偽の白は、要らないのではないか。それとも、彼の体が危うくなったら、それはまた要るのかも知れず、そのために、それは残されるのか。尤も、たとえ要らないのかも知れなくても、彼の体がそこにあるだけで、偽の白は、彼の体の奥底まで染み込んで、決して拭い去れないようでもある。

　何かが揺れていた。それは、彼の体なのか、彼の体を取り囲む何かなのか、それともその両方なのか。ただ、その揺れを彼に教えるのは、やはり、そこに微かに濃淡を描いて揺れている赤味だった。その赤味だけが揺れているのだろうか。彼も彼の周りも、止まったままだろうか。彼は、揺れている先を見ようとした。そこに揺れていないものが見付かれば、そこから、何が揺れていて何が揺れていないかも、見て取れるのではないか。

　揺れている先は、幾ら目を凝らしても、揺れていた。しかしそれは、何に対して揺れているのか。赤味にしても、何に対して揺れているのだろうか。彼は、その遠い先を見る目のままで、直ぐ身の周りを見回した。何か硬く小さなものが感じ取れた。円くてヌルヌルしているようでもあった。触れない方が良さそうだったが、もう触れてしまっているのだろうか。ただ触れている感じは伝わ

って来ない。しかし、そもそも体の感覚そのものが伝わって来ないのだから、当てにはならない。それらもまた、白と同じで、偽物のようであるしかなさそうだった。彼は、暫く、じっとその偽物の感触を味わった。それはもう、硬くても柔らかくても、大きくても小さくても、ただ偽物のようであれば構わなかった。いや、ただ偽物のようである事だけが頼りだった。それによってそれは、彼が係わらずにはいられないものになった。

　彼は、それを覗き込むようにした。もちろん、それが覗き込めるものかどうかは、分からないし、覗き込むようにしても、覗けているのかどうか、分からなかった。それでもそれは、恐らくは、平らで、温かくも冷たくもなくて、彼の体から取り出された、肉か骨の一部のようだった。いや、取り出されてはいない。しかし、彼の体と繋がってもいないだろう。だとしたら、それが彼の体で、それに触れているのは、彼の体の脱け殻だろうか。それとも、そこに彼の体が映っていて、その映っている中にしか、彼は、自らの体を感じられないのだろうか。だとしたら、それは、形でも色でもない、彼の体の中身を直に映し取る鏡のようなものだろうか。

　その在処を探り取ろうとしても、そこにはそれだけしかないのに、それは、擦り抜けるばかりだった。しかし、一体何から擦り抜けるのか、それさえ分からない。諦めると、自らが、ひどく疲れているのに気付かされて、彼は少し驚

いた。その疲れに囚われているせいで、彼の周りのものが、彼を見限って、一斉に、それぞれの殻の中に閉じ籠もって行くようだった。彼だけが、自らの殻を持てずに、そこに置き去りにされて行くようで、姿のないままに、ただ重く動きの取れない自らの体に、縛り付けられて行くようではないか。では、彼が探り取ろうとしたのは、その自らの重い体だったのだろうか。
まだ何も始まっていなかった。（二〇〇一年九月二十一日）

身振り

その重い体を持ち上げるようにして、それでも彼は、そこに映っているかも知れないものを、覗き込もうとした。目当てのものを覗き込めたかどうかは、分からない。しかし、何かを覗き込む事は出来た。彼よりずっと下の方に、一本の真っ直ぐな筋が見下ろされ、そこを、粉々に砕かれた、様々な色や形の破片が、双方向に入り乱れて流れていた。直ぐに飛び降りれば、その中に身を投じて、自らもその破片の一つになって、そこを行ったり来たり出来そうだ。しかし、時間が経つに連れ、彼とその筋の高低の差が縮まって、そこに至り着くには、這っていかなければならないような事になりそうだった。更に時間が経

てば、その筋の方が、高くなって、羽根でも生えない限り、どうにもそこへは、行けなくなってしまいそうだった。
　彼は、飛び降りた。その彼より先を、何かが下降して行くのが見えた。それは、彼の体の重さだった。重さだけが落ちて行って、取り残されて、フワフワと宙に浮いて、上にも下にも、行けなくなった。彼は、自分を突き刺して破裂させる、尖ったものが欲しくなった。そんなものは見当たらず、自分で自分を噛み切るしかなかったが、それで直ぐに歯が生える訳もない。ありもしない歯で、自分を噛み切る振りを、色々とするだけだった。
　しかし、その身振りの一つ一つが、その形を写し取った薄い煙のようになって、彼の体から、立ち上って行く。それらは、予め所定の位置が決まっていたかのように、順々に彼の上に積み上がっていった。そして、最後の身振りをすると、彼の体は、そこから消えた。その消えた彼は、その煙のような身振りの形の積み重なりへと浮き上がっていた。
　先ず、その一番下の身振りの形に触れると、燃えるような熱さを感じた。逃げ場はなかった。逃げようにも、逃げるべき彼の体が消えてしまっていては、どうにもならない。彼は、その身振りをなぞろうとした。しかし、それはもう、そこにある。彼に出来るのは、その身振りとは似ても似つかぬ身振りで、それに纏わり付く事だけだった。そして、皮が剥がれるように、そこから自らが離

れて行くのを、激しい痛みと共に感じた。その痛みの行き着く先に、暗く冷たい小部屋が見えた。行く事はもちろん、彼の声も何も、決してそこに届かせる事は出来そうにない。何のための小部屋なのか。その小部屋にも、痛みは満ちているのだろうか。痛みは、上辺では収まる方に向かって、そのために藻掻いたり叫びたくなったりはしなくなったが、その小部屋が見えている限り、痛みは、決して彼から離れそうになかった。

　彼は、一時でも、その小部屋から目を逸らそうと、次の身振りの形に触れた。また、燃えるような熱さが、彼を貫いて、その身振りから身を剥がされるように、痛みの中に巻き込まれた。そしてまた、その先に見えた小部屋は、初めのものよりは、何処か見窄らしくも見えたが、兎に角、それがまた見えた事が、彼に新しい痛みを付け加えるようだった。いや、新しい痛みなどない。同じ痛みが繰り返されて、彼を縛り付けるだけだ。その小部屋が見窄らしいなら、縛り付けられた彼の姿も見窄らしい。他は何も変わらない。そうして、身振りの形の積み重なりの中を、順に昇って行くしかなかった。それなら、その小部屋へは、少しずつ近付いているのだろうか。それとも、身振りの形を幾つかこなしただけ、その数は減り、小部屋を見直せる機会も減って、それだけ、その小部屋とは隔たったのか。全ての身振りの形を昇り終えた時、その小部屋は、直ぐ目の前にあるよりも、見失われてしまう方が、ありそうな事に思えた。そし

て、一度見出されたその小部屋を失えば、その中の痛みが彼に襲い掛かって、彼を呑み込んでしまいそうだった。彼は、横道に逸れた。それでも、振り返ると、その小部屋は、全く同じ大きさに見えた。彼は、その小部屋の方に向き直って、それを見詰めたまま、ゆっくり後退った。

　ガラスの破片がぎっしり敷き詰められている上を、素足で踏んでいるようだった。しかし、擽ったいだけで、痛みはなかった。笑いが込み上げてきて、彼は、吐き出すように、笑い声を出した。それは、ガラスの破片を震わせて、ガラスの破片もまた、一斉に笑い声を立てるようだった。彼は、自分がガラスでもないのに、ガラスと一緒に笑っているのを、変だと気付いた。しかし、笑うのを已める訳にはいかない。已めれば、きっと、ガラスが彼に襲い掛かってきて、彼の体を血塗れにするだろう。彼は、自分の体に、重さが甦ったのを感じたが、それは、中が血で一杯の薄い膜で出来た袋のようだ。そして、それを、尖ったガラス片から守るために、自らの体の中心に持ってこようとした。しかし、そうした積もりでも、必ず何時もどちらかに偏っているようだった。その偏っている方へと、彼の体は、動いていった。

　踏んでいるガラス片が、川のように流れ出した。彼が動いて行く程、その流れは、速くなった。その流れを見下ろす内に、自分が、その上をゴロゴロと回転しているように思えて来た。危険すぎる。慌てて自分の姿を探した。ガラス

の破片の川が、けたたましい笑い声を立てて、目にも止まらぬ速さで、流れているだけだった。彼は、岸辺に立ち尽くして、それを眺めていた。血で一杯の袋は、疾っくに破れて、中の血は全て、ガラスの川に押し流されてしまったに違いない。

もう、そこに立ち尽くしていても、仕方がなかった。ピラニアのような鋭い歯を持った魚になって、その川の中で、流れに逆らって、ガラス片を、ガチガチと噛み砕いて行きたかった。実際、そのようなものが、流れの中にいるのを見付けた。彼は、その場に横たわり、その身振りと口の動きを真似た。

まだ何も始まってはいなかった。（二〇〇一年十月二十一日）

泡

その自らの身振りと口の動きの一つ一つの輪郭が、ガラスの破片の煌めく輪郭のように、はっきりと見て取れた。そこはひどく窮屈に違いなく、それらは、直ぐに打ち当たって、彼の間近で、不機嫌そうにグラグラと揺れた。その目を切るような、余りにくっきりと浮き出る鋭利な輪郭に怯んで、微かに身をいざらせてしまうと、その間の幾つもの口の動きを象ったガラス片のようなものが、

彼の口から、次々に、ザラザラと溢れ出た。その一番新しい一つに目を落とすと、その中に、細かく千切られた様々な色の、その一片は、捩れて行く奥行きを感じさせる配置が、真っ直ぐに覗き込めた。色の一片一片は、その場で、止まり掛けた独楽のように、フラフラと回っているようだ。彼の冷たい息を吹き掛ければ、それらはまた、力強く回り出すだろうか。しかし、口は、直ぐにまた、ガラス片を噛み砕く動きに戻った。すると直ぐに、覗き見たのと同じ色の細片が、ガラスの割れ目のように、表面をキラキラ輝かせて、また口から溢れ出た。魚のような横に付いた片目で、後ろを見ると、そこには、それら細片が無数に犇めいて行く、一本の川のような流れが、もうずっと先まで続いていて、そのかなり遠くの方の、右に逸れようとする辺りに、彼の首のない体が、ポツンと浮かんでいるのが見えた。それは遠目にも、全く重みのない、中身の空っぽな、ただ形として見えるだけのものであるのが分かった。

　彼は、向き直った。すると、胴体から切り離された彼の頭は、色の細片の一つに過ぎなくなって、ギシギシと周りと擦れ合う音を立てて、川を流れていた。その色も形も、朧にも分からない。彼は先ず、自らの口を、探した。そこが川の源流の筈だ。しかし、川は、見えなくなるまで、上流に向かっても延びて、色の細片を一つ一つフラフラ回しながら、キラキラと煌めいていた。もう一度、横目で、そっと下流に視線を送ったが、胴体は、見えなくなっていた。

そこで、彼は、潜ろうと試みた。流れの深みからなら、色々と違って見えるだろう。しかし、全く潜れなかった。流れは平板で、深みはないのかも知れないが、それ以前に、また、重みを失っているのは明らかだ。重みがあるなら、深みのあるなしくらいは、はっきり感じ取れる筈ではないか。それならと、せめて、反転だけでもしようとした。それで、反転出来たかどうかは、分からない。なぜなら、反転しようとする前の身の回りの様子を、何一つ憶えていなかったからだ。ただ、トゲトゲした色の細片の流れて行くのだけが、見えた。細い方が上流で、太い方が下流だろうが、その流れる方向が、見て取れる訳ではない。細片の動きは、ただその場でフラフラ回るだけだ。

全ての細片が回っている。それなのに、彼だけは、回っていない。彼は、恐れを抱いた。いずれ、彼は、それらとの摩擦で擦り切れてなくなってしまうか、離れた所から見たら、一つだけ回っていない彼の姿は、ひどく目立ってしまって、それを目障りに思う誰かに、そこから取り除かれてしまうかも知れない。いや、どうして回っていないと決めつけられるのか。反転したかどうかも分からないなら、回っているかどうかも、分かる筈はない。回っていると思えないだけで、実は回っているかも知れないし、目だけが、特に端っこにあって、回らずに済んでいるのかも知れない。そして、その分からないのは、痛みをまるで感じられないからだ。彼は、先程真似た口の動きをまたして、今度は本当に、

色の細片を噛み砕きながら、上流だと思える方に、遡って行こうとした。それらは、ザラザラと硬い歯応えがあるようで、ガラス片のようにガチガチと砕けて、口の中で、半分肉に刺さったように、低く鈍く鳴った。首から下を失っていては、魚の身振りを真似る事も出来ず、なかなか先には進めなかったが、それで構わないのだった。痛みを取り戻すのが目的なのだから、同じ所に留まって、ずっと、硬い噛める物が絶えないのが一番だ。

暫く、そうして、口を動かしていた筈だったが、彼は、何時の間にか、流れの上にポツンと放り上げられて、その硬くゴツゴツした表面を跳ねながら、コロコロと転がっていくようだった。硬い物を噛んでいた筈の口は、閉ざされているどころか、何処が口かも分からなくなっていた。真っ白で、重みもなくて、まるでピンポン玉だ。硬い流れの凸凹に当たって、軽やかな音を、その空っぽな内側に鳴らしていた。それは、恥ずかしくなる程軽薄に響いて、何とか已んで欲しかった。

流れが右に曲がる所に差し掛かって、彼は、流れから弾き飛ばされた。その瞬間、彼は、ピンポン玉でなくなる事は出来たようだ。何処をどう飛ばされているかは分からなかったが、彼は常に、自らの飛ばされて行くのを見る事が出来た。なぜなら、その飛ばされて行く先に、真っ先に飛んでいって、その飛ばされて行く先の空間を拵えるのが、彼自らの仕事だったからだ。その彼は、次

第に消耗していった。愈愈もう力仕事は無理になったところで、出来合いのトンネルのようなものが現れた。渡りに舟と、そこに飛び込もうとすると、その脇から、透き通るように薄い赤色の、小さな花が、素速く目に飛び込んできた。その一輪だけを咲かせた、鞭のようにしなやかなそうな一本の細い幹だけの、背の低い鉢植えが、今にも倒れそうに、斜めに置かれていた。いや、それは、誰かの両手の中にあって、わざと傾けているのではないか。彼は、それを確かめようと、息を吸って、花の背後の匂いを嗅ぎ取ろうとした。

　しかし、その花と幹の先端の指し示す直ぐ先が、小さな部屋のようで、彼は、ついそちらに向きを変えた。もう戻る事は出来ず、そちらに転がり込むと、床が微かに揺れて、部屋の空気が何処となく赤味を帯びる気配だった。部屋は、閉じていなかった。奥には、敷居はあったが、壁はなかった。彼は、直ぐにその敷居を越えて、次の部屋に飛び込んだ。その次にもまた部屋が続く積もりで、また跳ねた。彼は、奥の壁にぶつかった。ぶつかる直前、壁に映る自らの姿を見た気がした。壁は、鏡張りなのだ。ただ、どんな姿かは分からない。ただ、そこが鏡になっているのだけが、分かった。そこを跳ね返った筈だった。しかし、彼は、そこで、自らを見失った。直後に、床をひび割れさせるような、衝撃が来た。体は、重くて硬かった。彼は、そこで、粉々に砕けた。砕けた破片は、裏表なく、全て鏡になっていた。部屋は細かく揺れ続け、赤味を帯びてい

る空気が、砕けた破片の触れ合う音を、単調に柔らかく響かせた。彼は、その響きに食らい付いて、宙に昇って行きたかった。形は粉々だったが、彼の重みだけは、一つに固まっていて、その重みだけが、微かに宙に浮いた。　今がチャンスと、彼は、それに一口で食い付いて、急いで呑み込んだ。

　部屋の赤味が消え、直ぐさま、そこは真っ暗になった。彼は、自らの重みを吐き出すまいと、歯を食いしばった。彼の体は、あちらこちらへ、くねくねと曲がりながらも、何処までも沈んで行くようだった。口が疲れて、重みを吐きたい誘惑に駆られた。重みを吐いたら、重みをそこに残して、彼だけが、物凄い速さで、そこから真っ逆様に落ちて行くように思えた。では、重みは、上へ行こうとしているのか。彼は、反転した事にしてみた。彼は、浮き上がっていて、もし重みを吐いたら、その重みを残して、彼の体は、そこから、垂直に、物凄い勢いで跳ね上がるのではないか。いや、そんな筈はない。彼は確かに、落ちていた。としたら、吐き出しそうな重みより、彼の体の方がずっと重いのだろうか。それとも、彼が吐きそうなのは、重みではなくて、彼の体の中にあって、彼の重みに逆らうものではないのか。そしてそれは、一つになって、大きな泡になって、今にも、彼の口から、真上に向かって、滑り出ようとしていないだろうか。もう、歯など食いしばっていても無意味なのだ。いや、初めから、歯を食いしばってなどいる筈がない。何処が口かも分からないのだ。泡は、

体の別の穴から出ようとしているのかも知れない。
もしそうなら、彼はもう、全て吐いていた。彼は、その吐いたものの中に居て、止まっていた。もちろんまだ、その吐いたもの自体が、あちらこちらへ動き回っていて、その中で、ただ動いていないように感じられるだけかも知れない。吐き出されて脹れ上がった大きな泡の中に、彼は収まっていて、その泡が、もし弾けたり破れたりすれば、また彼は、その外を落ちて行くのだろうか。ここで何かを始めるにしても、その泡を破らないように、そっと動き出すべきだ。いや、それも分からない。却って、素速く動かす方が、良いのかも知れないではないか。戯れに、彼は、泡と話をするための言葉を、自らの内に探ってみた。
まだ何も始まっていなかった。（二〇〇一年十一月二十一日）

壺

探られるのを待っていたかのように、言葉は、直ぐに見付かって渦を巻き、彼の中から溢れ出し、泡に向かって、投げ付けられていった。泡は、ただそれを受け止めて、言葉が泡の内側を隙なく積み上がって行くままにした。しかし、それは、言葉なのだろうか。言葉を探そうとして見付かったのは、確かだが、

積み上がって石の壁のようになった姿は、とても言葉のようではない。では、どのようであれば、言葉の姿なのか。彼の内から湧いて出て、真っ直ぐ泡に届いて、泡がそれを受け止めるなら、それが、泡に向けられる言葉でなくて何なのか。それは、ずっと溢れ出るままで、石の壁は拡がる一方のようだ。このままでは、泡の内側をすっかり覆い尽くして、泡からの返事も貰えないままに、彼は、その中に閉じ込められてしまう。それとも、それが返事なのか。泡は、彼を、彼の言葉の中に閉じ込めたいのか。彼には、それを止める力はなかった。

　それは、溢れ出るのを已めなかったが、その内に、もう積み上がりはしなくなった。泡のちょうど半分までが、埋められて、それ以上積み上がるには、それは内側へと窄んで来なければならないが、それが出来ない。言葉は、その円い壁の縁を、その向こうに滑り落ちて行くばかりのようだ。それなら、もっと粘っこいものを吐けと言う事か。それが、泡の返事か。彼は、自らの内に、言葉より粘っこいものを探った。それは、言葉の直ぐ脇に見付かって、湧き出す言葉に纏わり付いたものから、泡の方に順に運ばれた。すると、壁はまた、積み上がり始めた。ただ、内側には狭まって来ず、そこから却って拡がって、壁の全体が、口の広い壺のような形になった。泡は、それきり、消えてしまったようだ。

　そこへ投げ掛けられてゆくものも、消えた。彼は、壺の底に居て、疲れ果てて

ていた。溢れ出て来そうなものは、何も残っていない。しかし、疲れ果てているなら、その疲れ果てた体があるのではないか。その姿を、壺の底に見て取ろうとすると、何もない壺の底の表面の一ヶ所に細かなヒビが入って、それが独りでに剥がれ、その細かな破片が擦れ合って、ザクザクと音を立てて、更に細かく砕けていった。それは、壺の底全体に拡がりながら、次第に壺の厚みに食い込んでいる。このまま磨り減って、壺の底が抜けるのは、時間の問題だ。その剥がれて擦れて砕ける音の中に、彼の重みが隠されているようだった。その音が壺の中に響くなら、直ぐにも、それを掴まえるのだが、壺の内側が、彼より先にその音を吸い取ってしまう。何も出来ないでいる内に、壺の底にちらほらと隙間が見え始めた。破片のちいさなものから、そこを零れ落ち、音が漏れ、彼の重みも、そこを透けて落ちて行くようだが、どうにも出来なかった。それに連れて、破片はどれも、色とりどりになって、愈愈、刺々しい形になって、擦れ合った。擦れ合うばかりで、もうそれ程には、砕けるようではなく、入り組んだ形の色が、壺の底で蠢いているようだ。そうして、却って、底に開いたり隙間を覆い隠した。そうさせるのは、彼だろうか。元々、彼の中から出たものだ。彼の全てが溢れ出たなら、その蠢くのが彼だろう。もし、彼でないとしても、彼を、その下に隠しているには違いない。彼は、その隠されている自らを掴みだそうと、破片を掻き分けた。壺の底は、隙間どころか、穴が、ポッカリ

と幾つも開いていて、色とりどりの破片は、見る間に、そこからサラサラと流れ落ちて、綺麗になくなってしまった。そうなってみると、穴は、丸ごと一つの、大きな円い穴だった。

　流れ落ちたものの替わりに、そこにすっぽり収まると、その穴の形が、彼の姿だった。だから、彼は、その穴から落ちる事はないが、そこから抜け出す事も出来ない。抜け出すには、その穴を、壺の底から動かして、壺の内側を通って、大きく口を開けた壺の上の縁に、辿り着かせるしかない。伸び上がるように力を込めると、穴は、細長く延びて、溝のようにはなったが、直に、力尽きた。ただ、それは、更に進もうとすればであって、そこに留まるままなら、彼には力が満ちていた。その力で、彼は、壺を丸ごと動かせるようだった。

　壺は、何かの上に置かれているのでも、宙に浮いているのでもなさそうだ。縛られて吊されているか、何処か窮屈な所に、不安定に嵌り込んでいる。彼は、壺ごとクルクル回って、明るい方と暗い方を見極めようとした。しかし、明るさを感じても、その直ぐ隣に、その明るさを打ち消して余りあるような暗さが、擦り寄ってきたりして、明るさと暗さは入り交じるばかりで、何時まで経っても、方向は見定まらない。そうしている内に、壺は、何処からともなく、表面がボロボロになって、磨り減ってゆくようではないか。あちこちに隙間が出来て、彼の姿である穴の形も、その隙間の幾つかと繋がってしまって、怪しくな

った。このまま、壺の形が崩れれば、彼の姿も跡形もなくなる。尤もそれで、壺の穴から解き放たれるなら、その方がマシか。その穴の縁から、欠片がどんどん零れていって、穴は、壺の底が丸ごと抜け落ちたような、大きく円いものになった。それなら、彼の姿も大きくなったのか。いや、穴が拡がる程、彼は、その穴の中心に押し込められ、その姿まで奪われて、息が詰まるようだった。

　ただ、そうしてまた、壺ごとクルクル回ると、明るさと暗さは、よりはっきりし、その境目に線を引く事さえ出来た。なかなかはっきりしない所も、線を引き直している内に、明暗二色に埋まって行き、何処も彼処も、明るいか暗いかに分けられた。後は、その広さを目で測ってゆけばいいのだ。その一番広い明るい所が見付かれば、そちらが明るい方で、一番広い暗い所が見付かれば、暗い方だ。そして、その二つは、どう見てもやはり、直ぐ隣り合っている所にある。それどころか、見れば見る程、殆ど同じ方向に重なってしまうようだ。では、その反対側は、どうか。そこでは、明るい所と暗い所が、数え切れず細かく分かれていて、そのどれか一つの明るい所の形を見て取ろうとすると、その周りの明るい所だけが、一斉に明るさを増して、他の何処より眩しい程明るく見えたし、どれか一つの暗い所を見据えると、その辺りはすっかり暗くなって、明るい筈の所まで、明るさを吸い取られた。つまりそこは、明るければ最も明るく、暗ければ最も暗く、どちらでもない時は、ただ薄ぼんやりとして、

明るくも暗くもない。それで、正反対の二つの方向を見定められはした。決して、見間違える事はない。ではしかし、一番明るいのは、どの方向かとなると、分からなくなる。出来れば、明るい方へ行きたい。そうして、壺の穴を少しでも明るくすれば、その中に押し込められた自らの姿も、救い出せるように思える。

　取り敢えず、一番広い明るい所を選ぶ事にした。反対側は、明るく見ようとすれば、眩しい程明るくは見えても、見せ掛けに過ぎないように思えた。ただ、選んではみても、そちらに壺を引っ張って行くのは、とても無理のようだ。まだ何も始まっていなかった。（二〇〇一年十二月二十一日）

バラバラ

　暫くすれば、壺ごと崩れて欠片ばかりになるに違いない。そうなれば、壺の穴から解き放たれて、明るい所へ進んで行けるだろうか。それとも、壺が形をなくせば、壺の穴もなくなり、彼もまた、散り散りの欠片になってしまうだろうか。もしそうなら、急がなければならない。しかし、向いている先が、本当に明るいかどうかも分からないし、明るさなど、何の役にも立たないのかも知

れない。それなら、出来るかどうか分からないが、穴の縁から欠片が零れてゆくのを、止めてみるべきではないか。壺の方に向き直ると、その全体の形が見回せたが、それはもう、彼を押し込めている穴とは、すっかり離れ離れであるようだ。壺が、磨り減ってなくなっても、穴だけは、そのまま残るに違いない。壺と言っても、泡に向かって吐かれた彼の言葉の残骸でしかない。そこに開いた穴の縁をなぞったところで、彼の姿は、疾っくに奪い去られている。彼は、壺を捨てた。尤も、彼は、その底の抜けたガラクタに押し込められていたのではないので、それで、何処かへ抜け出せた訳ではない。ただ、急ぐ必要はなくなった。何が、彼をそこから解き放ってくれるか、じっくり見極めればいい。

　そうしてまた、一番広い明るい所を見直したが、そこはただ平板なだけで、その平板さが、何処かの明るさを拾って来ているだけのようだった。寧ろ、それと殆ど重なる、一番広い暗い所の方が、ずっと、計り知れない明るさを隠し持っているようではないか。彼は、壺の残骸を離れ、彼を押し込めている穴ごと、その暗い所の方へ引き寄せられた。明るい所の平板な裏側が見えて、彼は、穴を離れ、独りでそこに乗り移った。それは、細長い一枚の板のように、彼を押し込めていた穴の上に架かり、そこから、彼を乗せたまま、暗い方に流れ落ちていった。

　板は裏返って、彼を隠した。そのまま暗い方へ流れて行く程、彼の居る所は、

益々暗くなったが、その彼の居る所が一番暗くて、その暗くなればなる程、その先が、その暗さを抜けて明るく見えた。板から離れれば、その明るさに手が届くようでもあるが、彼をその一番暗い所に残して、板だけが、先に流れて行ってしまいそうでもある。ただ、そのどちらがいいのかは、分からないのだ。それなら思い切って、板から離れてみるべきか。しかし、板を離れないでいる事が、一番いいのかも知れない。このままで居れば、暗さと明るさが極まるまでを、見て取れそうだ。しかも、暗さと明るさは、高い山と深い谷とが隔たるようでは全くなく、却って、近付いているようなのだ。板に乗ったままでも、今に明るさに直に触れられるのではないか。

　いや、もう明るさに触れていた。しかし、それは、板の尖った先だけで、彼は、板から遠く離れた低い所から、それを見上げるだけだった。ただ、彼は、暗さの極みに落ち込んだのでもない。暗さも、やはり、明るさと殆ど重なって遠くに見上げられた。彼の周りには、彼がものの形を見て取るのに最も適った明るさが、齎されているようだった。そして、その彼に見て取れた彼の姿は、粉々に砕けた鋭利な欠片がそこに敷き詰められたものだった。欠片の表面は、裏も表も鏡のようで、その一つ一つに、遠くで重なり合う明るさと暗さが映っていた。しかし、そこまで見て取れると、では、なぜそれが彼の姿なのかを、考えずには済まなくなる。それは少しも、　彼のようではないのではないか。

遠く離れてしまった明るさに突き刺さっていた板が、ヒラヒラと落ちてきた。それは、敷き詰められた欠片の上に、それらの欠片と同じ大きさになって、彼が乗っていた時よりずっとキラキラしながら落ちて、直ぐに、他の欠片と区別出来なくなった。それもまた、彼の姿の一部になったと言う事か。それとも、それらはどれも、ただの明るさを映す平板なだけのものの果てで、丸ごと、彼とは別のものなのか。どちらでもありそうだ。ただ、彼はここに居て、ここには、ただそれらが敷き詰められているだけなら、たとえ別のものであっても、互いに、全く無防備で係わり合ってはいるのだ。しかも、見えるのがその細かな欠片だけなら、それが彼の姿に見えるのも尤もだし、はっきり彼の姿と分かるものが見付かるまで、仮にそれを彼の姿としても、齟齬は来さないのではないか。しかし、そう考えると、直ぐにも彼は、そこを掘り起こして、仮でないちゃんとした彼の姿を掘り出したくなった。もちろん、掘り出す手立てなどなく、ただそこを嘗めるように眺め回して、手掛かりになりそうなものを探すだけだ。

　そこに映っているのは、重なり合う明るさと暗さだけだ。どの欠片にも、彼は映っていない。それらは、敷き詰められた欠片が彼の姿なら、そこに彼の姿が映らないのは当たり前だが、それが仮の彼なら、仮でない彼の姿が、たとえ影だけでも、映りそうなものではないか。まさか、遠い上の方で重なり合う明るさ

と暗さが、彼の姿である筈もない。それなら、その一つ一つに小さく映っている、数え切れない程の明るさと暗さの重なりが、彼の姿ではないだろうか。その他には、もう、何もないではないか。

彼は、その映っている中に、その数と同じだけバラバラになって、入り込んだ。その映っているものが、外からどう見られるかは、その見える通りだ。では逆に、その映っているものは、何をどう見るのか。その映された、遠くの明るさと暗さの重なりを見るのだろうか。映っているものの中に入り込んだ彼に見えたのは、もうどうしようもない程、細かくバラバラになった彼の姿だけだった。それらをまた、一つに組み合わせようにも、どれがどれか、さっぱり分からない。しかし、そうしてバラバラだから、それは彼の姿なのではないか。一纏まりに組み立てられてしまったら、たとえそれが人の姿に似ていても、彼の姿ではなくなってしまうに違いない。それが彼の姿であるには、バラバラでなければならないようだ。

まだ何も始まっていなかった。（二〇〇二年一月二十一日）

暴発

しかし、そのバラバラであるのが、自らの姿であると彼に知れるなら、バラバラであっても、そのそれらは、彼によって一つに纏められたとも見える。ただ、そうだとしても、そのバラバラな姿のままで、彼に何が出来るだろう。そうやって、途方に暮れるその事くらいだ。では、バラバラな内のどの辺りの欠片が、途方に暮れているのか。それとも、全ての欠片が同じように途方に暮れるのか。欠片はどれも違う形で、全てが同じ事に係わるとも思えない。取り敢えず、欠片の内の、どれか一つを取り上げて、それが何をしているか、調べてみるべきだ。しかし、その一つを決めようとすると、その隣のものが割り込み、その隣のものに決めようとすると、それはまた、その隣に取って代わられる。そうして、次々に動いて、どれか一つを捉え切れない。一つを諦めて、幾つかの纏まりでそれを捉えようとしても、同じように、それらは、彼から逃げ回った。

しかし、そのようにして追っているのは、バラバラな彼でなく、ただ独りの彼ではないのか。そう思って、周りを見ると、同じように、欠片を追っている彼が、幾らでも見付かって、その見付けた彼が、見付けられた彼になって、彼は、数えきれず続く、見付けて見付けられる彼の中を、動き回るしかない。そうして動き回る数え切れない彼同士が、所狭しと、そこで擦れ違っている。そしてまた、その様子を見渡そうとする、数え切れない彼が、何処かに居るのだ

ろうか。ただ、その彼の姿を、見て取ろうとしても、巧く見えて来ない。或いは、もう何処かに見えているのだが、その見えている所に、彼が辿り着けないだけか。それが、バラバラの彼の限界だろうか。そう考える彼は、独りだろうか。それとも、数えきれず、何処かにまた、バラバラに散らばっているだろうか。

　彼は、自らを投げ出すかのように、高い方を見上げた。遠くの明るさと暗さが、同じように萎んで見えた。そしてもう、それらは、明るさと暗さではなく、何かの一塊りの輝く影のようなものだった。色も形も分からず、ただ明るさと暗さが、互いを打ち消しあって、一塊りに凝り固まっている。バラバラな彼に映り込んでいるのも、当然、そのようなものであるだろうが、そのまま、それが更に遠ざかって、何も映らなくなったとしても、自らがバラバラであるのさえはっきり捉えられていれば、それはそれで、構わないようでもある。

　その見上げられる一塊りの輝く影が、二つに分かれた。見間違いかと思って見直すと、更にそれぞれが、二つに分かれ、同じ動きが、次々に後に続いて、見る間に、数え切れない程になった。しかし、そう見えるだけで、バラバラの姿の彼が、そこにどのようにか投影されただけかも知れない。何かの弾みで、直ぐにまた一つに戻るのではないか。それらは、全て同じ大きさで、少しも重ならず、隙間も開けず、ぴったり並んで、その詰め合わされた領域を拡げるよ

うにして、数を増やし続けた。そして、数えきれないにしても、彼の姿のバラバラな欠片の数より、明らかに増えて、見上げられる所は、一面、その輝く影の塊りで、びっしり覆われてしまった。

それを見上げる彼が、粉々に砕けた鋭利な欠片の上に、独りで乗っかっていた。下に敷き詰められた欠片は、バラバラな彼の姿の筈だったが、彼は、その姿から、どうやら抜け出せたようだ。試しにその一欠片を拾い上げて、じっくり見てみたが、裏も表も、同じくすんだような色で、全く鏡のようではなく、何も映さなかった。そのくすんだ色の中に、うっすらと粉を塗したような、微かな輝きが、掠め過ぎるのが見て取れた。上から届いたものに違いない。また見上げると、輝く影の表面が、どれもピカピカの凸面の鏡になっていて、その一つ一つの真ん中に、それを見上げる彼の姿が、小さな点になってポツンと映っている。見上げる限り、その鏡面が数えきれず埋まっているのだから、そこに映る彼の姿もまた数え切れない。

見上げられる内の、一番外の縁が、一瞬、目に入った。そこでは、まだまだ、一塊りの輝く影が、数を増やしていて、縁は、より遠くへ遠くへと、流れ出すように拡がっているようだ。そして、新たに現れた一塊りずつの輝く影の表面も、暫くしてから順々に鏡に変わってゆく。そこは、彼に見付かって慌てて身を隠すようにして見失われたが、彼にはそれは、耐えられない事に思えた。一面の

輝く影の鏡の密集は、何時か必ず、拡がりきれなくなって、何処かで暴発し、彼の上に、鋭利な欠片となって、一斉に降り掛かって来るに違いない。逃げ場のある筈もない。バラバラな姿から抜け出したりしなければよかったが、もう戻れない。

　彼は、拾い上げたままの一欠片を、知らない内に、磨き続けていた。それで、耐え難さが幾らか紛れていただろうが、それに気付いて、その表面がピカピカの凸面の鏡になっているのが分かると、それまでに紛らしていた耐え難さに、一気に向き合わされるようだった。そして、その狭い中に、数え切れない輝く影の鏡と、そこに映る自らの姿とが、映り込んでいるのを見ると、その一番外の縁がどうなっているかを覗き込もうとして、それから目を逸らせなくなってしまうのだった。しかし、幾ら角度を変えて、その鏡の凸面の端の奥の奥を覗き込むようにしても、その縁は見えて来なかった。それどころか、その手にしている鋭利な筈の欠片が、角が取れて丸みを帯び、そのどちらが裏か表か見て取ろうとする内に、すっかり丸い形になって、奥を覗き込もうにも、ただ、その鏡張りの小さな玉をクルクル回すしかなくなってしまっている。

　それは、独りでにクルクル回って、止まらなくなった。そのままでは、彼は、何処かに弾き飛ばされてしまいそうだ。機先を制して、彼は、その鏡の丸い表面に身を投げだ。そうして、その映っている中の、奥へ奥へと身を滑り込ませ

てゆくと、何時の間にか、その一番外の縁を越えて、その先にまで行き過ぎてしまったようだった。振り返ると、それまで決して隙間を開けずに並んでいた輝く影が、バラバラになっている。

まだ何も始まっていなかった。（二〇〇二年二月二十一日）

鈴の音

彼女もまたそれらを眺めていた。バラバラの輝く影は、もう何も映さず、ただ何処までも飛び散って行く以外、その大きさや形を変える事も、その表面の色合いを微かに変える事さえ出来なかった。彼女が、つまらなそうにそれらから目を離すと、彼だけが、そのすっかりバラバラの、輝く小さな影が飛び散って行くのを追って、飛び散って行った。それを眺めるのも彼だけで、それらに追い付くと、その飛び散って行くものの一切は、彼であるより他なかった。

そこから彼は、彼女の細い右腕を振り上げる姿を見た。飛び散った影を数えているように見える、その彼女の人差し指の指先が、小さくクルクルと回っている。それに釣られて、彼も回り出すようだったが、何処をどう回っているのかは分からない。彼女は直に、少し寒そうに肩を震わせて腕を下ろし、ずっと

腕を上げていたのを綺麗さっぱり忘れたかのように、その腕で頬杖を突いた。その腕が下ろされたのに合わせて、彼も何処かに下りて行けなければならない筈が、彼は回り続けるしかなく、彼女の姿は遠ざかって見失われた。しかし、何の目印もないのに、その見失った辺りを、彼は何時までもちゃんと見分けていられた。そこもまた回って見えて、その周りには何時も見当たらなかったが、その回った行き過ぎた後にだけは、彼に最後に見取れた彼女の一歩が、浮かんだり消えたりするようではあった。そして、その明滅もまた、回っている彼がそれに近付いてしまうのを避けるように、独自の軌跡を描いて、注意深く回っているようだった。そうして、何もない所を、彼と、見失われた彼女の残して行ったものとが、ただ回ってだけいては、何時まで経ってもその隔たりは埋まらない。彼は、先程の彼女の身振りを真似て、腕を上げ、彼女を見失った辺りに向けて振り立てた人差し指を、小さく回した。指は直ぐ、何かに突き当たったかのように重みが掛かって強張り、回している積もりが、小さな三角形を延延書き損なっているようにしか動かなかった。なぜそうなるのか。彼女の残していったものが、彼をそこに塞ぎ込めておこうとしているとしか、考えられない。塞がれるままでいる訳にはいかない。彼は、指を回そうとするのを已めないまま、少しだけ、指を突き出した。指先に何か形のある硬いものが乗って、回っているようではないか。

もう片方の手を伸ばすと、それは小さな白い杯の

ようで、今にもその手に取れそうだった。すると杯は、その手を逃れるように傾いた。或いはそれは、支えている人差し指が、わざとそれを傾けたようでもあった。そしてその傾けられた杯から、獣のような匂いのする黒っぽい雫が、彼の頭に降り掛かった。その濡れた髪を撫でた掌を見ると、黒い雫は少しだけ赤味掛かって見えた。それを振り落とそうと手を振り回すと、その手に彼女の長い髪が纏い付くようだった。ただその髪が、もう彼女の体から切り離されているのは、確かだった。その切られた側に、彼の体は回り込んで行った。

杯は独りでに砕けて、見失われるようだったが、そこに彼が強く目を凝らすと、散って行く細かな白い破片は、全て脹れたＶ字の形をしていて、彼がそちらに両腕を差し出して、そのどれか一つでも掴み取ろうと、両手を閉じたり開いたりすると、その破片全体が、大きな脹れたＶ字を描いて並んで、彼から逃げ去って行くようだった。その形は、彼には、左右に突き出た角にも見えたので、また更に両腕を伸ばして、その角の先を二つとも掴み取ろうとした。その白い角は、それを形作っている細かな破片が更に細かく砕けて、粉になって闇に揉み込まれるようにして消えた。自らの腕までも、その闇に吸い取られてしまうようで、彼は、何とか腕を手前に引き戻そうとした。戻された両腕は、ただ前に向けて差し出されていて、手首から先が暗く沈んで見えた。縄は見えないが、まるで手首の辺りを縛られているかのようだ。それとも、彼女の切られ

た髪が目に掛かって、見難いだけか。何であれ、彼は、その暗く沈む辺りを明るくして見直そうと、首を振り立てたが、その動きは、首だけでは済まず、彼の全身に波打つように及んで、どうにも止まらなくなった。それでも手首から先だけはそのままのようで、やはり縛られているのか。ただ手首は動かせなくても、十本の指の自由は利くようだった。その代わり、指を動かす度に、その一本ずつの指に呼応して、体のあちこちが、ズキズキと痛んだ。まるで、指の一本一本が、体の各部位を受け持って、縛り上げているようだ。彼は、痛みから少しでも逃れようと、汗びっしょりの体を出来る限り捻ろうとした。そこへ、彼女の長い髪が巻き付いてきた。ただそれで、愈愈動きが取れなくなるのでもなく、巻き付いてくる髪に促されるかのように、体は幾らでも捻られた。

何時の間にか、指は動きを止めていた。そして、体より指の節々がひどく痛んだ。体中の痛みが、指の骨の中にびっしり押し詰められたようで、出来るなら、手首から先をねじ切ってしまいたい。いや、先程からそうしようと思って、体を捻り回しているのではないか。指は左右とも、隙間を開けず五本ずつぴったり揃って、掌は、薄っぺらな板切れのようだった。その指差されている先に、微かに彼女の影が行き過ぎたようだった。彼は、何とかその指の向きを逸らして、その影との係わりを少しでもなくそうとした。そんな影を追わなければ済まなくなったら、彼の全身に深く巻き付いたかなりの量の彼女の髪が、彼の体

を、あっと言う間に絵に描かれたように、動かなかった。
その痛みと共に切り分けてしまうに違いない。しかし、指は、彼は、最後の積もりで首をまた捻り、その先を真っ直ぐに見詰めた。その先は、彼の直ぐ目の前まで近寄せられ、彼はそこを見下ろしているようだった。その先は、彼の体は、そこへドサリと倒れ込んだ。そこは、少しだけ柔らかくて、少しだけ丸みを帯びていて、少しだけ暖かかった。そこは、少しだけ彼女の影が、そこに、先に横たわっているのが分かった。その影は、行き過ぎた筈の彼女の影が、起き上がり、彼の体に巻き付いた彼女の髪を、鷲掴みしては引き抜いていった。そうして、彼の体は、バラバラに切り分けられていった。その度に、指の中の痛みが、その切り分けられた肉の中に配られてゆくようだった。指は、骨の中のつ痛みから解き放たれ、掌も柔らかくなり、手首の自由も利くようになった。少しずつ手は、バラバラの肉の周りを忙しく動き回り、それをまた元のように繋ぎ合わせた。それでも彼は、起き上がれなかった。そうして、何処か遠くから微かに漏れてくるような鈴の音が、全身の肉と肉、骨と骨の間に入り込んでいるのを、倒れた体を反転させながら、聞き取った。その音が、彼のバラバラな体を繋ぎ止めているのだ。もし、その音が已めば、また彼の体はバラバラだろう。
彼は、唇を真ん丸く開き、頬を硬く引き締め、巻いた舌を左右に震わして、その鈴の音を真似た。それが、体の中の鈴の音の掠れた辺りを補う事は出来な

くても、他の音から守れてはいるようだ。彼女の影が、柔らかく丸みを帯びて暖かい中に染み込んでゆくと、彼はもう、そこに倒れ込んだままではいられなくなった。起き上がれないまま、彼は、体をその外にずらした。体の中の鈴の音が、全身の肉と肉、骨と骨の間から一斉にけたたましく鳴り出した。それで彼は、起き上がれた。しかし、鈴の音は、ある限り鳴り尽くされたようで、体の中は全く静まり返ってしまっていた。口で鈴の音を真似たくても、どうすればいいのか分からなくなっていた。一歩でも動けば、肉や骨を繋ぐものはもう何もないのだから、彼の体は、直ぐにバラバラに崩れてしまうだろう。立ち尽くしたままでいるしかない。その足元へ、彼女の影が、ゆっくりと染み出てきて、彼を囲んだ。その影の中でなら、彼は動く事が出来た。そうして、その影の縁に立つと、その外からの音が聞こえてくる。その中に、遠くから彼を眺める者達が、彼について語っている声も混じっていて、彼らは一様に、彼の体が、見掛けと違って既にバラバラであると言い募っているように、彼の耳には聞こえた。或いは、そうではないのだろうか。影から踏み出せば、彼らがただ彼らの用事を済ませるために喋っているに過ぎないと、分かるのかも知れない。確かに、バラバラであるしかない者の事など、誰が顧みたりするだろうか。それとも、彼らの用事は全て、彼女の影の中だけではあっても、バラバラなまま立って動ける彼に係わろうとするものだろうか。

（二〇〇二年三月二十一日）

波打ち際

　その彼らの声は遠くへ掠れて行くが、そうである程、その一言一言が、小石が転がり込むようにして、彼の耳の奥へと埋まっていった。それが溜まって、耳の中から溢れそうになると、彼は掌で耳を塞ぎ、足元の彼女の影に向かって、声で出来たそれらの小石を吐き出す積もりで、次々に言葉を投げ掛けていった。言葉と言っても、短い叫び声のようなものばかりで、彼にも意味は分からないが、言葉であるのは間違いない。空耳だろうが、足元に小石がポトリポトリと落ちるような音がして、そこで彼女の影は、少しずつ褪せていった。立ったままでは、その影を見失いそうだったので、膝を突いて、そこに顔を近付けた。

　また、彼らの掠れた声が、遠くから聞こえてきた。そちらを見ると、そこは砂浜で、大勢が車座になって、上体を左右に傾けながら騒いでいるようだった。彼女の痩せた背中も見えた。彼は、彼女の影の消えてしまった足元に唇を押し当て、それまでの短い叫びのようだった言葉を一繋ぎにして、そこの湿った土の中に吹き込んだ。側から、彼女の髪が噴き上がるようで、素速く掴んで束ねてみると、彼は、手足を折り畳んだ自らの体を、荷物のようにきつく縛り上げ

ていた。

　彼らの砂浜を、波がぐるりと回り込んで、その彼の体を浮かせた。波は向きを変え、渦を巻きながら、彼を彼らの方に押し流した。波が引くと、彼は目が回っていて、彼らの中に居る筈の彼女の姿を見付けられそうになかった。彼らは、長い議論をやっと終えたようで、痺れた足を揉みながら、脂の浮いた顔に薄笑いを浮かべ、ノロノロと立ち上がった。そこからどちらに向かうかを、議論していたに違いない。彼らは一斉に、波打ち際に沿って明るい方を向いて、腹の中から取り出した鈴を掲げて鳴らした。彼は、それに加わりたくて、縛りを解こうと体を激しく揺らしたが、丸っこい荷物のようであるしかなかった。彼らは、波打ち際に沿って歩き出し、後に、車座と同じ大きさの円い絨毯を残して行った。巨大な金色の杯の傾く図柄の刺繍が、絨毯一杯に描かれていた。彼は、その絨毯に嚙み付いては、少しずつ体をずらして、その真ん中に行き着いた。それからそこに居座っては、絨毯の真ん中を少しずつ嚙み千切っては、穴を開けた。

　見回すと、絨毯の周りを、ぐるりと人が囲んで笑っている。殆どが、ひょろりと背の伸びた、濡れた浅黒い肌の子供だった。彼が、「何処から来て、何時からそこに居るのか」と尋ねると、それが合図のように、彼らは、砂だらけの汚い痩せた足で、絨毯の中に走り込んできて、彼が吐き捨てた、唾まみれの絨

毯の切れ端を、大騒ぎで奪い合った。砂の上の絨毯は、フワフワと波打って、彼の体は、呆気なく絨毯から放り出された。弾みで、最後に噛み千切った布切れに、絨毯を飲み込んでしまった。それから、彼らは、掴み取ったそれぞれの布切れに、更に自分の唾を塗り付けて、それを、私の開けた穴に埋め戻そうとしたが、一斉にその穴に駆け寄ったので、誰もそこには行き着けず、互いの体をはね除け合うだけだった。その内に、絨毯は段々と内側に捲れ上がって、彼らを包み込むようだった。彼が、それを彼らに大声で告げると、その内の彼の直ぐ側の一人が、彼に、鈴を鳴らすように促した。彼が体を揺すると、鈴の音は、砂浜を揺らして、砂を細かく跳ね上げる程の勢いで、彼の体から響き出た。子供達は、砂まみれの絨毯を払い退け、疲れた顔で、波打ち際を暗い方に、絨毯の切れ端を握ったまま黙って歩き出した。最後の一人が、彼を絨毯の中に転がした。風が吹いても飛んで行かないように、重しにされたようだった。絨毯は、彼らに踏ん付けられて、また平べったくなっていた。

　彼女が、足早に、細い腰を振って、一人で戻って来た。忘れ物を探すが、見付からないようだ。絨毯には、見向きもしなかったが、その周りを、踊るように何度も回った。それからやっと、砂の中に何かを見付けて引っ張り出すと、黒々とした人の姿だった。まるで体中に墨を塗ったようだが、よく見ると体を覆っているのは、黒い砂だった。ベトベトしていて、手で払ったくらいでは落

ちそうにない。彼女は、その砂だらけの腰に彼女の腕を回して、それを抱き上げ、絨毯の中に放り込んだ。彼は、自らの縛りを一瞬で解いて、立ち上がって、その体を受け止めた。彼女は、直ぐに立ち去ろうとしたが、先程の子供達が戻って来ていて、行く手を阻まれ、その中に呑み込まれた。子供達は、足は汚れたままだったが、お揃いの洗ったばかりのような白いシャツを着込んでいて、絨毯の中に入ってきて、座り込んだ。絨毯の中は、彼と子供達とその中の何処かに居る筈の彼女で、一杯になった。

　それから、子供達は、私に抱き締められたままの砂まみれの黒い人の顔を見上げて、何か言葉を掛けてくれるようにと、催促した。抱かれながらも、じっと直立の姿勢で体を強張らせたまま、口を開く様子など少しもないので、彼がその場でピョンピョンと跳ねて、その体を揺すると、黒い砂がパラパラと落ちた。掌で、それを受けた子供達は、さも大切そうにそれを分け合い、耳の中に入れていった。砂は皆、ベトベトしていたので、一粒入れただけで、すっかり耳を塞ぐようだった。子供達の間の絨毯の上をクネクネと這い回って、その砂を受け取るまいとしている彼女の姿を、彼は見付けた。それは直ぐに、子供達にも見付かったが、彼女を掴まえるどころか、逆に彼らは、彼女のそこに居るのを驚き、我先に絨毯の外に飛び退いて、どちらへ向かって逃げたらいいか分からないかのように、その辺りを忙しく行ったり来たりしていたが、その内、

皆何処かに消えてしまった。彼女が、にっこり笑って立ち上がると、私の抱いている人を覆っていた黒い砂は、大分取れていた。

「もっと揺すって。」と、彼女は、彼に明るく声を掛けた。

揺するどころか、彼には、その体は重すぎて、抱いているのもやっとだった。砂が剥げただけ、肌は滑りやすくなっていて、その体は、彼の腕からするりと抜け落ちて、絨毯の上に横になりながら、彼女の足を払った。彼女は、転びそうになったが何とか持ち堪え、絨毯を波打たせて、何歩かよろけた。彼女の片足が、絨毯の真ん中の穴の中に嵌り込んだ。座り込んだ時、子供達がそこに戻した、唾だらけの布切れは、どうやら彼女の足の下に踏ん付けられてしまっているらしい。波打つ絨毯に足が縺れ、腰が砕けそうになりながらも、彼は、フラフラと後退りして、絨毯から外に出て直ぐ、砂の上に尻餅を搗いた。彼女は、その彼の姿からわざと目を逸らすようにして、穴に嵌って出せなくなった自らの足を、調べるようにさすった。黒い砂を纏う人は、四つん這いで絨毯を出て、立ち上がり、子供達の姿を探すようだった。

「みんな、行ってしまいましたよ。」と、彼は、尻餅を搗いたままで声を掛けた。

黒い砂を纏う人は、砂の地面を見詰めて、二、三歩進み、膝を突いて、そこを掘り始めた。掘ると言うより、両手で砂を掻き出しては、それを体に塗すよ

うだった。掘り進むに連れ、砂は段々と黒くベトベトしていって、直にまた、その人の体は真っ黒になった。

「私にも、砂を掛けて下さい。」と、彼は言った。その声は、その黒い人の方にではなく、波打ち際に沿って、明るい方に、一本の筋のように響き渡って行った。

その明るい方の遠くから、その声を聞き付けたに違いない者達が、一塊りになって戻って来た。彼らは、三人を遠巻きにし、隣の顔を見合っては、ひそひそ声で何か相談をするようだった。相談を終えると、大きな酒瓶を一口ずつ回し飲みし、それが一周した所に荒い息遣いで集まって、全員で砂を掘り始めた。下に掘るのではなく、彼らはそこから道を延ばして行きたいようで、横に掘り進んだ。その向きは、海と反対側だった。絨毯の真ん中で動けない彼女が、それを見咎めて何か言ったが、彼女に背中を向けている彼らには、聞こえないようだった。彼は、少しずつ延びて行く、真っ直ぐな黒い道から目を背けた。

「子供達は、何処へ行ったんでしょう。」と、彼は、黒い人に声を掛けた。

砂まみれの黒い人は、絨毯を避けるようにして、海の側に回り込み、そのまま、海に入っていった。海は、ずっと浅瀬が続くようで、その人の姿がすっかり海面に沈む頃には、その頭は、米粒くらいだった。彼一人がそれを見送った。

彼女は、周りの絨毯を引っ張り上げ、自らをその中に包み込もうと悪戦苦闘し

ている。潮が満ちてくるようで、緩やかに上って来る波が、彼と彼女を避けるように回り込み、大分掘り進まれた真っ直ぐな道に、泡立った海水を導いて行く。（二〇〇二年四月二十一日）

甘味

彼は、四つん這いになって、黒くベトベトした砂の穴を覗き込み、穴の底の一際黒く輝く大粒の砂を一つ摘み上げて、口に含んだ。舌の上で溶けると、それは砂糖のように甘かった。

「手伝ってくれないの？」という声に顔を上げると、彼女は、絨毯の端を重そうに引っ張り上げたまま、細い腰をくの字にして動きが取れないようだった。

「足を引っこ抜けば。それなら手伝えると思うけど。」と、彼が言うと、彼女は黙って顔を背けた。

穴の底を引っ掻くと、輝く大粒の砂は幾らでも出て来た。一々摘み上げるのも面倒で、彼は、穴の中に逆様の上半身を滑り込ませ、直に穴の底にかぶりついた。舌が慣れたのか、直に甘みは失せて、苦味さえ感じられる。穴から出ようと手足をばたつかせても、逆に、ジリジリと穴の中に埋まってゆくしかない。

彼女の笑い声が、遠くで鳴り響くようだった。彼は、もう藻掻く事も出来なくて、寧ろ穴の中にどんどん嵌って行く方が、助かる近道のように思えて、頭を底へ底へと突き立てたが、その内に息が出来なくなって、気を失うしかなかった。彼女の笑い声の代わりに、ゴーゴーと水の唸る音が、耳の中に流れ込んで来たが、そこから呼び掛ければ、彼の声は、その唸る水を伝って、海に入っていった砂まみれで真っ黒な人まで届くようで、却って心強く思えた。

　気が付くと、彼は、砂浜に真っ直ぐ掘られた水路に仰向けに浮かんでいた。直ぐ脇で、砂の上に直に座り込んだ者達が、車座になって、酒盛りをしているようだった。彼らは、目を覚ました彼の顔が可笑しいのか、彼の方に見て、一斉に笑い声を上げた。体はひどく重かったが、彼は、ノロノロと水から上がり、砂の上に俯せに倒れ込んだ。酒盛りの連中は、水路を挟んだ向かい側にいて、真っ白な砂の中に溶けるように、少しずつ遠ざかって行く。

　誰かが、彼の脚を引っ張っているのだった。後ろを見上げようにも、俯せのままでは、どうにもならない。彼の足首を掴んでいる手の感じは、女のようだった。彼は、砂の上を、また円い絨毯の側まで引きずられて行った。首を捻って後ろを見ると、砂の上を動き回る彼女の脚が見えた。やっとの事で上体を起こし、自分の体を見ると、砂まみれで真っ黒だった。

「手伝ってよ。」と、彼女は言って、短く囁くような叫び声を幾つか上げて、

独りで勝手によろけて、わざと絨毯の真ん中の穴に、足を突っ込んだ。彼は、自分の嵌り込んだ穴を探したが、見付からなかった。海から人が上がってきた。さっき海に入っていった砂まみれの黒い人に違いなかったが、その黒い砂はすっかり洗い流されて、裸の全身は真っ白だった。その人に黒い体を見られたくなくて、彼は、捲れ上がった絨毯の端から、その下に潜り込んだ。

　それで隠れた積もりになっても、息を潜めただけ無駄だった。絨毯の下の、横になって砂に埋もれ掛けた彼の顔に、白い顔が近付いてきて、鼻息を鳴らした。その顔に彼が唾を吐き掛けると、白い人は、彼を引きずり出そうとした。逆に彼は、その人を引きずり込もうとしたので、二人はそこで、横になって取っ組み合いになり、絨毯は大きく捲れ上がった。彼女は、その反対側の絨毯の縁を両手で持ち上げて、絨毯が、左右から彼女の体を包むようになった。彼女は歓声を上げたが、彼にはひどく耳障りだった。

　組み合う程、彼の全身を覆う黒い砂が、白い人の肌に擦り付けられて、白黒はっきりしていた二人の色の差は、殆ど見分けが付かなくなった。彼が、その事を口にすると、その砂まみれの相手は、急に力を抜いて、絨毯の外へ転げ出た。彼もそれに続いた。絨毯はまた、元に戻るようだった。揉み合ったせいで、砂は、大分彼の肌を傷付けていた。腹の辺りを撫でた手を舐めると、血の味に混じって、甘さを感じ取れた。彼は、そこで寝返りを打っては、自らの全身を

撫で回して、掌に付いた砂と血を舐めた。それは最後まで甘かった。やっと苦味を感じた時には、砂も血も付いていない、真っ白な指をしゃぶっていた。

力が湧いてきて、素速く立ち上がった。見回したが、組み合った相手の姿はなかった。彼女はもう、絨毯を引っ張り上げる事はせずに、ただ黙って、穴に嵌った足を見詰めていた。その彼女に向かって、

「絨毯の図柄だけど、このでっかい金色の杯は何？」と、彼は、急き込むように話し掛けた。

「穴の底が、段々上がってくるよ。」と、彼女が言った。

それを聞いて、彼は吐き気を催した。吐き出されるのは、彼が最後に噛み千切って飲み込んでしまった絨毯の切れ端だろう。穴の中で、彼女の足を押し上げているのも、彼が噛み切った絨毯の切れ端に違いない。恐らくは、彼と子供達の唾が段々と染み込んで、脹れているのだ。それらが、パズルを解くように正しく組み合わされば、絨毯の真ん中の穴は、自ずと塞がりそうだ。ただ、残りの最後の一切れは、彼の胃の中で動き回っている。

「足を退けたら。」と、彼は、やっとの事で言った。

「やだよ。」と言って、彼女は、尖った目で彼の方をちらりと見てから、穴の中の足に少しずつ体重を掛けて、脹れ上がってくるものを、踏み付けるようにした。

「何を手伝って欲しいんだっけ。」と言いながら、彼は、胃の中のものを何処に吐き出すべきか考えていた。そして、それは、彼女の顔面でなければならないように思えて仕方なかった。

「別に何も。」と、彼女は言って、空を見上げた。暗く垂れた雲が、今にも雨を降らせそうだった。その空を見て、彼の吐き気はやや収まった。彼女も、雲行きが気になるようだった。そうしている内に、押し上げられた切れ端で、絨毯の真ん中の穴はすっかり塞がれ、彼女の細長い足の甲が、剥き出しにされた。ただ、その足の下には、まだ彼の胃の中にある切れ端だけが、欠けているに違いなかった。彼は、絨毯の中にヨロヨロと踏み込んで、彼女の体を突き飛ばした。しかし、今まで開いていた穴が何処なのか、全く分からなかった。大体の見当で撫で回しても、表面は滑らかなだけだ。胃の中がまた、グルグルと跳ねた。吐き出しても、それを埋めるべき穴は、すっかり塞がれて跡形もない。吐いた所を汚すだけだ。

彼女は、絨毯の脇で、突き飛ばされたままの横座りになって、砂を弄っていた。彼は、もう一度、自分が撫で回している絨毯の刺繍について、彼女に尋ねたくなったが、どうせ碌な答えは返ってこないだろうと思って、

「あっちで騒いでるけど、行かないのか？」と、わざと強い調子で尋ねた。

彼女は、彼の方にちらりと笑顔を見せてから、ゆっくり立ち上がって体の砂

を払い、絨毯の縁を半周して、水路の方に歩き出した。ヌルリとした塊が込み上げてきて、彼はそれを、右の掌に吐いた。その溶け掛けた金色の表面に、ポツポツと黒い点がこびり付いている。彼は、尖らせた舌の先を、恐る恐るそこに付けてみた。暫くそのままにしていたが、甘味も苦味も出てこなかった。彼は、絨毯の外に出て、左手だけでその端を掴んで、絨毯を引っ張った。現れ出た砂の表面は、濡れて黒っぽく、真ん中に小さな穴が開いている。彼は、左手だけでその穴の中の砂を引っ掻いた。

　ポツポツと雨が落ちてきた。薄紫から黄色へと変わってゆく海の色だけが明るくて、潮は少しずつ引いてゆくようだった。彼は、水際まで駆けていって、右の掌の上のものを、海に向かって思い切り放り投げた。それは、風に戻されて、彼の直ぐ足元に落ち、平らな砂の上の、波とも言えないような緩い海水の流れに洗われると、表面の金色が溶けて剥がれて、筋を引いて沖の方へと流れ出た。彼は、慌てて水に入って、その金色の筋を追った。その筋もまた、水の流れと同じでゆっくりだったので、水の流れを読んで待ち構えていれば、全て彼の掌に掬い取る事が出来た。

　彼の二枚の掌は、すっかり金色になった。その中に黒い点がポツポツと浮いている。尖らせた舌の先を、その点に押し付けると、そこだけ甘いのが、点のまま感じ取れた。黒い点は黒い点のままで、何度そこを舐めても、甘味も、点

のまま変わらなかった。（二〇〇二年五月二十一日）

反響ー甘み

著者　u_

© 2002 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published